

フィンランド型アントレプレナーシップ教育から見た日本の社会科教育

教育学研究科 修士課程

教科教育専攻

社会科教育専修

205M017 増山 稔

2009年8月10日

はじめに

上田薫は、『知られざる教育』¹⁾の「社会科の方法」の中で、社会科は、「抽象化に対する抵抗、具体的な関係のあくことなき追究を、その本質としている。(社会科の本質を、社会事象における関係の連続的研究と規定する。)」と説き、基礎学力とは、「単なる土台ではなく、応用のきく知識であり、能力である。応用しうる力は、自己変革を可能にする力だということである。」とし、知識の特質²⁾は、「(ア) 動的な網の目を形成するもの、(イ) 発展するもので自己変革する力をもつことが必要であり、(ウ) 個性的統一の体制の即するという意味での相対性と自己否定的に発展しつづけなければならぬという意味の相対性という2つの相対性を持つことが必要である」と記した。また、「知識が生きた問題解決において有機的に働く場合と、知識の形成すなわち教育の場とにおいて、知識が真の知識として働く。」とし、「このような働きをもつものを、とくに知識(体系)の核と名づけたいと思う。」としている。さらに、「絶対の一を求めることは学問の、また知識の宿命である。絶対一の、普遍とは、実にそれにおかう動き、すなわち方向性以外のものではないのである。相対性の自覚のみが飛躍による動揺をはずめ創造を可能にする。」とした。³⁾

ところが、現代の、近頃の、社会科や教育界や世間はどうだろうか、TVではどの局でもクイズ流行^{ばやり}であり、自治体や教育産業界では検定流行^{ばやり}であり、各小学校では悉皆の全国学力テスト(小学校6年生対象)の実施をみている。クイズは、「問い」と「答え」の1対1対応という断片的短絡的知識であり、記憶力の多さや記憶したものを引き出す速さを競うものであり、無機的、静的である。検定もまた、注入された無機的静的なもの(記憶量と引き出す速さを競うもの)である。全国学力テストも、使い方を間違えれば、系統的知識や徳目主義を育成するのに便利な注入式教育に陥る怖れをもっている。また、身の回りですすめられている小学校の社会科学習では、年間の時間数が減らされ、自主作成の単元よりも1時間ぽっきり型の既成の指導計画に則った授業が当然のように展開されている。問題解決学習ではなく、毎時教師(指導者)が子どもたちに課題を出して考えさせる課題解決学習(これを問題解決的学習と考えている者もいる)が行われている。

一方、OECD(経済協力開発機構)は、「基礎的な言語や思考能力は機能的に獲得されるべきである。基礎的な技能は繰り返しやるから定着するのではなくて、使う機会や応用する範囲が広がっていくと同時の形成される。」という考え方を打ち出している。なんと上田薫の教育哲学の知識と同じ考え方なのである。このOECDのポスト産業主義の学力観に最も成果を挙げているのがフィンランドである。このフィンランドを中嶋博⁴⁾は、

① 2003年 PISA で総合ランク1位

② 経済競争力世界ランク(WFF) 1位

③ 居住地、性別、経済的状況や母国語の如何に問わず、教育への平等の機会

- ④地方での教育の接近性
- ⑤性差別の皆無
- ⑥教育が総体的に無償
- ⑦総合的非選別的基礎教育
- ⑧支援的柔軟な管理：全体の中央集権的な助言と地方での実施
- ⑨発展志向評価と生徒の評価（テストも序列もない）
- ⑩高度の資質を備えた自主性を持った教師

という特徴をもっていると講演（2005年東京）している（①～⑩は筆者が加筆校正）。このように、フィンランドの社会と教育は我が国からみるといくつかの羨ましい特長をもっているが、私は、個の学力を保証している要素として、基礎学校で実施されている「統合的教科横断テーマ」の学習が大きいと考えたのである。

私には、上田薫教育哲学とフィンランド教育（PISA テスト世界一）の2つは、根っこが同じで、目指すものも同じだと思われる。その共通点を探し、世に紹介したいと考えたのがこの研究の始まりである。

なかでも、私は、フィンランドの「統合的教科横断テーマ」の中の「アントレプレナーシップ教育」と、戦後初期の社会科の取組とに、同じもの・似ているものを見つけたのである。

1) 上田薫、『知らせる教育』1958、黎明書房。

2) 『知らせる教育』「知識についての覚え書き」

3) 『知らせる教育』「社会科と道徳教育」

4) 中嶋博：早稲田大学名誉教授。著書に、庄井良信共著、『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書店、2005、がある。

第1章 PISA調査が望むリテラシーにおけるフィンランドと日本の比較

第1節 PISAの望むリテラシーとは

PISA調査においては、OECD（経済協力開発機構）は、21世紀のポスト産業主義社会において要請される能力を「コンピテンス」として定義し、その「コンピテンス」の基本要素となる知的能力を「数学リテラシー」「読解リテラシー」「科学リテラシー」として基礎学力の再定義を行い、その「リテラシー」を問題解決状況における知識の活用能力を意味するものと規定している。¹⁾

このような「コンピテンス」や「リテラシー」は、一見 OECD という市場原理に基づいて推し進められている機構が示したものであるにもかかわらず、「人類の全体の幸福を願う 21 世紀のポスト産業主義社会を展望し、人類の現在や近未来の能力を適確に分析し、求めているもの」と考えている。¹⁾

2003年版 PISA 調査結果報告書『生きるための知識と技能2（国立教育政策研究所編）』では、これらの「リテラシー」を「読解リテラシー(Reading Literacy)」「科学的リテラシー(Scientific Literacy)」「数学的リテラシー(Mathematical Literacy)」と表記している。さらに2003年度調査では、「問題解決能力(Problem Solving)」についても評価した。

これら4つのリテラシーの定義は『生きるための知識と技能2』によると以下の通りである。

数学的リテラシーの定義：数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力。

読解リテラシーの定義：自ら目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。

科学的リテラシーの定義：自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意志決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づく結論を導き出す能力。

問題解決能力の定義：問題解決の道筋が瞬時には明白ではなく、応用問題と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけでは存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力。

定義や各評価分野の問題で扱う諸側面の関係については、表(1-1)と表(1-2)を参照されたい。

1)佐藤学、「リテラシー教育の現代的意義」日本教育方法学会編、『リテラシーと授業改善』図書文化、2007。

表1-1 PISA2003年調査の各評価分野の定義と問題で扱う諸側面

分野	数学的リテラシー (Mathematical Literacy)	読解リテラシー (Reading Literacy)	科学的リテラシー (Scientific Literacy)	問題解決能力 (Problem Solving)	
定義	数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的に関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠にもとづき判断を行い、数学に携わる能力。	自ら目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。	自然界及び人間の活動によって起こる自然界の変化について理解し、意志決定するために、科学的知識を使用し、課題を明確にし、証拠に基づき結論を導き出す能力。	問題解決の道筋が瞬時には明白ではなく、応用問題と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけには存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力。	
問題で扱う3つの場面	内容 または 構成 content or strakuture	数学的な内容：実生活でみられるような数学的概念のまとまり。主として4つの「包括的アイディア」（「量」「空間と図形」「変化と関係」「不確実性」）からなる。	テキストの形式：テキストには、物語、論説、推理などの散文形式の「連続型テキスト」と、表、図、ダイアグラムなど散文とは別の方法で情報を提供する「非連続型テキスト」がある。	科学的知識または概念：物理学、化学、生物学、地学、宇宙科学などの主要な分野から選択され、力と運動、生命の多様性、生理的变化などの多くのテーマから導かれる。	問題のタイプ：意志決定、システム解析・設計、トラブル・シューティングの3つのタイプからなる。
	プロセス processes	数学的プロセス：生徒が数学的な内容に取り組むのに必要な技能のまとまり。次の3つの能力クラスターに分類される。 i) 再現クラスター ii) 関連づけクラスター iii) 熟考クラスター	読む行為のプロセス：次の3つのプロセスに分類される。 i) 情報の取り出し ii) テキストの解釈 iii) 熟考・評価	科学的プロセス：証拠に基づいて習得し、解釈し、行動する能力を中心とし、次の3つのプロセスからなる。 i) 科学現象の描写、説明、予測 ii) 科学的調査の理解 iii) 科学的証拠と結論の解釈	問題解決のプロセス：問題の性質を理解し、特徴づけ、表現し、解決し、これを熟考し、その解法伝えることが含まれる。
	状況 contexts	数学が用いられる状況：実生活で生徒が遭遇するような私的、教育的、職業的、公共的、科学的な状況。	テキストが作成される用途、場面、状況：私的な用途、公的な用途、職業的な用途、教育的な用途などの状況のいずれかまたはすべてにおいて、テキストを用いること。	科学的状況または文脈：生活と健康、地球と環境、技術について、日常生活における異なる状況で科学を用いること。	状況または問題の文脈：教室場面や学校カリキュラムとは区別される生徒の私的な生活、仕事や余暇、地域社会や社会全般において生徒が遭遇すると思われる文脈。

(出典：国立教育政策研究所編、『生きるための知識と技能2 OECD 生徒の学習到達度調査(PISA) 2003年調査国際結果報告書』、ぎょうせい、2004.)

表1-2 PISA2006年調査の各評価分野の定義

	科学的リテラシー	読解リテラシー（読解力）	数学的リテラシー
<p>〈定義 および その特徴〉</p> <p>Definition and its distinctive features</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とその活用 ・科学の特徴的な諸側面を人間の知識と探究の一形態として理解すること ・科学とテクノロジーが我々の物質的、知的、文化的環境をいかに形作っているかを認識すること ・思慮深い市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に、自ら進んで関わること <p>「科学的リテラシー」は、科学的概念の理解と同時に、科学的な見解を適用し、証拠について科学的に考えることのできる能力を求めるものである。</p>	<p>自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力。</p> <p>「読解力」には、読み解いた文字を理解するだけでなく、読み、解釈・熟考、及び生活における自らの目的を達成するために読みを用いる能力が含まれている。</p> <p>PISA調査では、読むための学習というよりもむしろ学習するための読みに焦点を当てており、生徒は最も基本的な読みの技能について評価されるわけではない。</p>	<p>数学が世界で果たす役割を見つけ、理解し、現在及び将来の個人の生活、職業生活、友人や家族や親族との社会生活、建設的で関心を持った思慮深い市民としての生活において確実な数学的根拠に基づき判断を行い、数学に携わる能力。</p> <p>「数学的リテラシー」には、数学をより広範に機能的に用いること、すなわち様々な状況において数学の問題を認識し、公式化する能力が含まれる。</p>
<p>〈知識領域〉</p> <p>knowledge domain</p>	<p>「科学の知識」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物理的システム ・生命システム ・地球と宇宙のシステム ・テクノロジーのシステム <p>「科学についての知識」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学的探究 ・科学的説明 	<p>テキストの形式</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「連続型テキスト」－物語、解説、議論などの様々な種類の散文 ・「非連続型テキスト」－グラフ、書式、リストなど 	<p>数学的領域及び概念に関するまとまり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・量 ・空間 ・変化と関係 ・不確実性
<p>〈関係する能力〉</p> <p>Competencies involved</p>	<p>科学的課題またはプロセスのタイプ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学的な疑問を認識すること ・現象を科学的に説明すること ・科学的証拠を用いること 	<p>読解の課題またはプロセスのタイプ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報の取り出し ・テキストの解釈 ・テキスト熟考・評価 	<p>数学に必要とされる技能から能力クラスター</p> <ul style="list-style-type: none"> ・再現クラスター（簡単な数学的操作） ・関連付けクラスター（直接的に問題を解くためにアイデアを結びつけること） ・熟考クラスター（より広い数学的な思考）
<p>〈状況〉</p> <p>Context and situation</p>	<p>個人的、社会的、地球的な状況における用途に焦点を当てた科学の適用領域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康 ・天然資源 ・環境 ・災害 ・科学とテクノロジーのフロンティア 	<p>テキストが作成される用途</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私的な用途（個人的な手紙など） ・公共的な用途（公的文書など） ・職業的な用途（レポートなど） ・教育的な用途（学校に関連する読みなど） 	<p>個人的、社会的、地球的な状況における用途に焦点を当てた数学の適用領域</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私的な用途 ・教育的及び職業的な用途 ・公共的な用途 ・科学的な用途

（出典：国立教育政策研究所編、『生きるための知識と技能3 OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2006年調査国際結果報告書』、ぎょうせい、2007.）

第2節 PISA 調査における日本とフィンランドの位置

2003年調査結果を国際比較すると、日本は、数学的リテラシーが6位、読解リテラシー（読解力）が14位、科学的リテラシーが2位、問題解決能力が4位と上位グループに位置取っている。一方、本研究の対象であるフィンランドは、数学的リテラシーが2位、読解リテラシーが1位、科学的リテラシーが1位、問題解決能力が2位であり、世界一の結果を出している。

2006年調査では、日本は、数学的リテラシーが6位、読解リテラシーが15位、科学的リテラシーが10位で相対的に少し順位を下げ、フィンランドは、数学的リテラシーが2位、読解リテラシーが2位、科学的リテラシーが1位であり、総合的にみると相変わらずの世界一のリテラシーをたたき出している。

第3節 各リテラシーにおける日本とフィンランドの比較

私は、日本も高い PISA 調査結果を示しており、なにがなんでも世界一が良いという考えを持っているわけではない。しかしながら、7～14才の学年の授業時間（2008年調べ）はフィンランドが5750時間、日本が6340時間で、フィンランドの方が授業時間が少なく、何か秘密が隠されているような気がしてならない。そこで、もう一歩進み、日本とフィンランドの2006年 PISA 調査の結果を詳しくみてゆくこととする。

フィンランドの科学的リテラシー全体（図1-7）は、レベル3以上が82.2%（日本69.5%）であり、レベル1以下が4.1%（日本12.1%）である。このことから、フィンランドは平均以上の生徒が8割以上おり、低位の生徒は日本と比べても1/3と少ないことが分かる。

同様に、読解リテラシーは、レベル3以上が79.7%（日本59.6%）であり、レベル1以下が4.8%（日本20.1%）である。ここでも、フィンランドは平均以上の生徒が8割以上おり、低位の生徒は日本と比べても1/4と少ないことが分かる。日本は全体の1/5（100人の中の10人）がレベル1であり、100人のうち6.7人（6.7%）がレベル1未満（フィンランドは0.8%）にいる。低位な生徒があまりいないフィンランドに比べ、日本は低位な生徒はOECDの平均値に近い。

さらに、数学的リテラシーを比べてみる。フィンランドではレベル3以上が79.7%（日本68.1%）であり、レベル1以下が5.9%（日本13.0%）である。上の2つのリテラシーと同じ傾向があり、レベル1未満だけをみると、1.1%（日本3.9%）ととても

少ない。

顕著なのは、フィンランドと比べると、日本は低位な生徒が2倍～8倍多いことが分かり、フィンランドでは、どのように低位な子への学力保証の学習が取り組まれているのかを知りたくなる。また、高位な生徒や中位の生徒が多いことには、リテラシー育成の秘密があるに違いない。

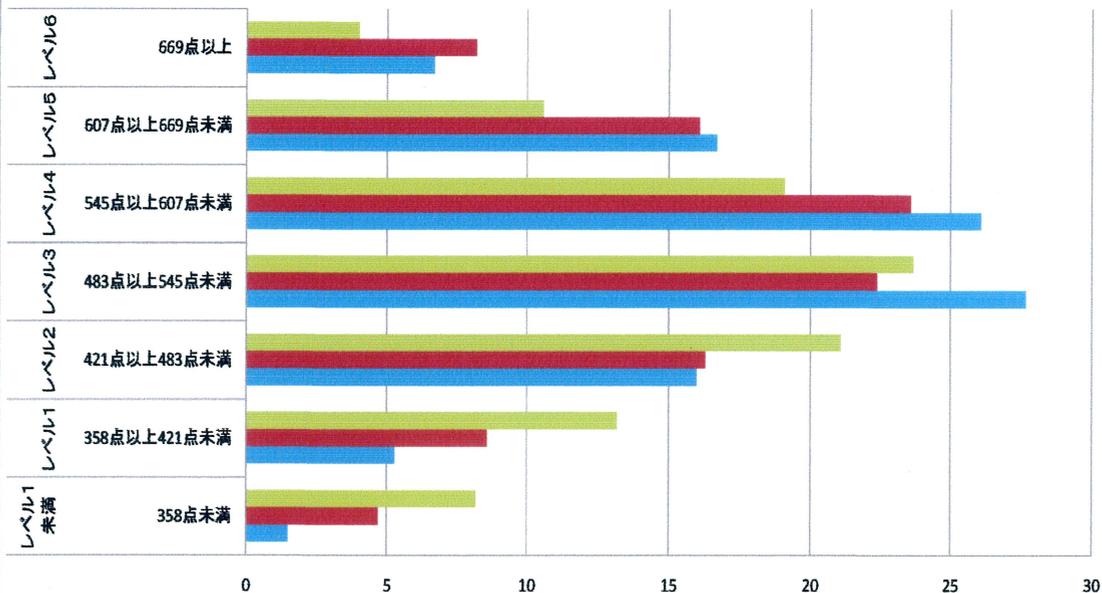
さらに、社会科教育の研究者として、興味関心を持つ 2003 年の問題解決能力を比べてみると、フィンランドのレベル3は 32.4 % (日本 35.6 %), レベル1未達は 4.6 % (日本 9.9 %) と高位な生徒は日本の方が多いが、低位な生徒がフィンランドは半分以下で、羨ましい限りである。

そこで、問題解決能力を問う各問題の分析を進めてみた。正答率は、フィンランドが日本を上回ることもあるが、日本がフィンランドを上回っている問題もある。決定的な違いは、フィンランドの生徒は、誤答が多く、無答が少ない、日本はというと、OECD 平均並の無答率で、「6.1 エネルギーに関する問題②」と「6.2 休暇旅行に関する問題②」については、無答率が 23.0 % (フィンランド 7.8 %) と 27.0 % (フィンランド 16.1 %) と問題を解こうとしていない生徒が目立つ。フィンランドでは、「間違ってもいい」「やる気がある」*) 「挑戦してみる」「根気よく取り組む」という生徒の姿勢・態度がみられる。

この『「間違ってもいい、やってみよう」』『やる気がある』『挑戦してみよう』『根気よく取り組もう』という児童生徒の姿勢・態度』を育成している教育を担っているのが、アントレプレナーシップ教育を始めとする「統合的教科横断テーマ」の教育(23 頁資 2-1 参照)だと私は考えている。

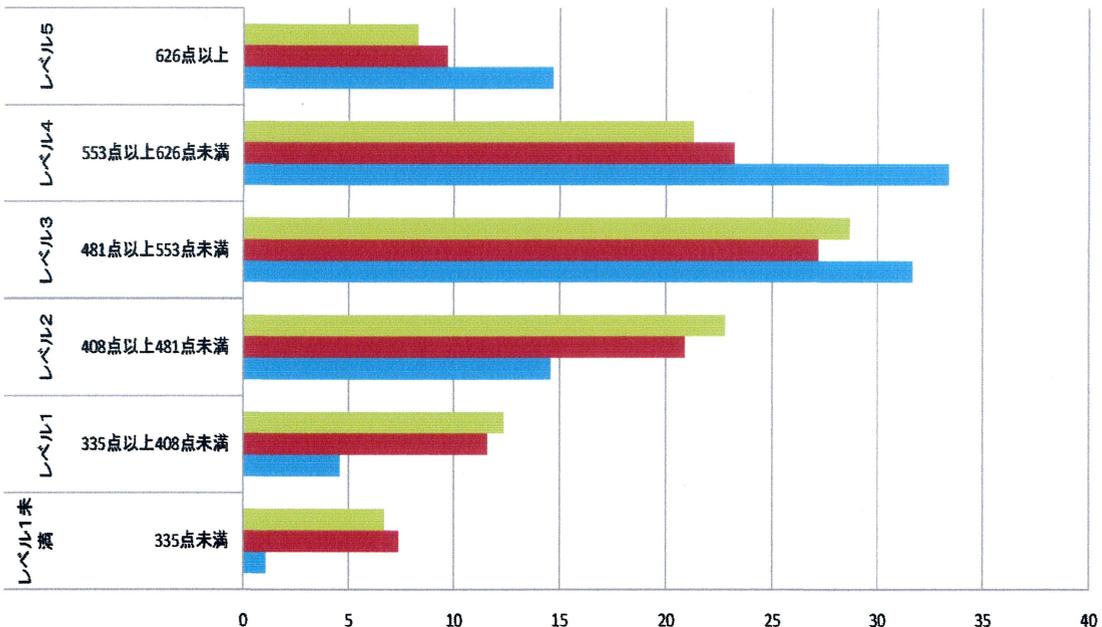
*) 山根栄次による「アントレプレナーシップ」の訳語の1つ

図 1 - 1 2003数学的リテラシー



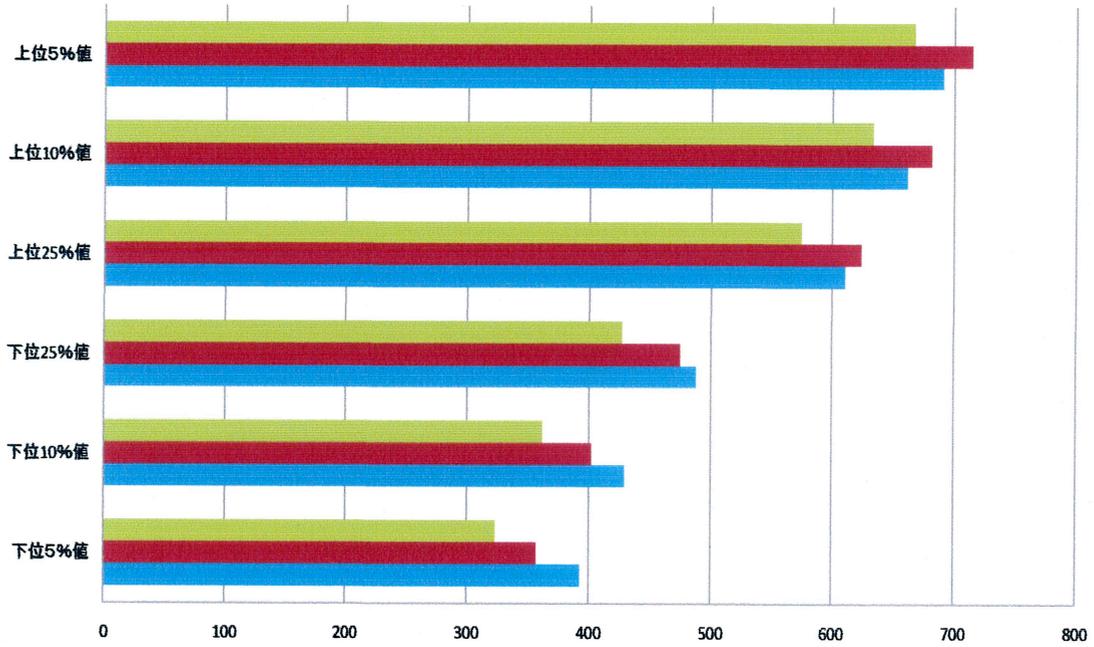
	レベル1未滿	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6
	358点未滿	358点以上421点未滿	421点以上483点未滿	483点以上545点未滿	545点以上607点未滿	607点以上669点未滿	669点以上
■ OECD平均	8.2	13.2	21.1	23.7	19.1	10.6	4
■ 日本	4.7	8.6	16.3	22.4	23.6	16.1	8.2
■ フィンランド	1.5	5.3	16	27.7	26.1	16.7	6.7

図 1 - 2 2003読解リテラシー



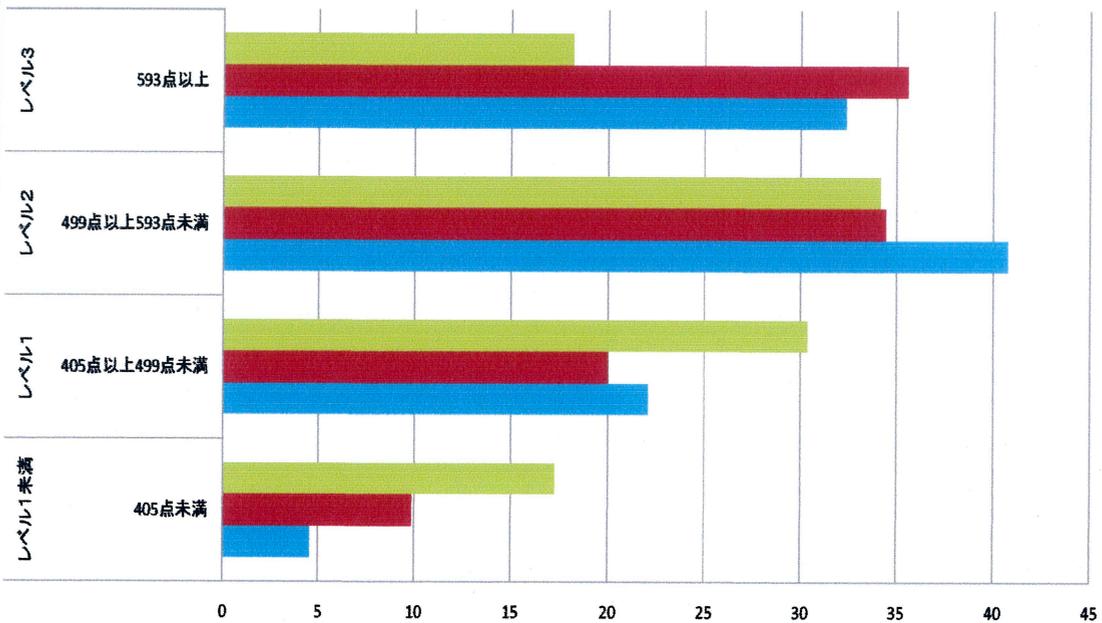
	レベル1未滿	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
	335点未滿	335点以上408点未滿	408点以上481点未滿	481点以上553点未滿	553点以上626点未滿	626点以上
■ OECD平均	6.7	12.4	22.8	28.7	21.3	8.3
■ 日本	7.4	11.6	20.9	27.2	23.2	9.7
■ フィンランド	1.1	4.6	14.6	31.7	33.4	14.7

図 1 - 3 2003科学的リテラシー



	下位5%値	下位10%値	下位25%値	上位25%値	上位10%値	上位5%値
OECD平均	324	362	427	575	634	668
日本	357	402	475	624	682	715
フィンランド	393	429	488	611	662	691

図 1 - 4 2003問題解決能力



	レベル1未満	レベル1	レベル2	レベル3
	405点未満	405点以上499点未満	499点以上593点未満	593点以上
OECD平均	17.3	30.4	34.2	18.2
日本	9.9	20	34.5	35.6
フィンランド	4.6	22.1	40.8	32.4

図 1 - 5 2006数学的リテラシー

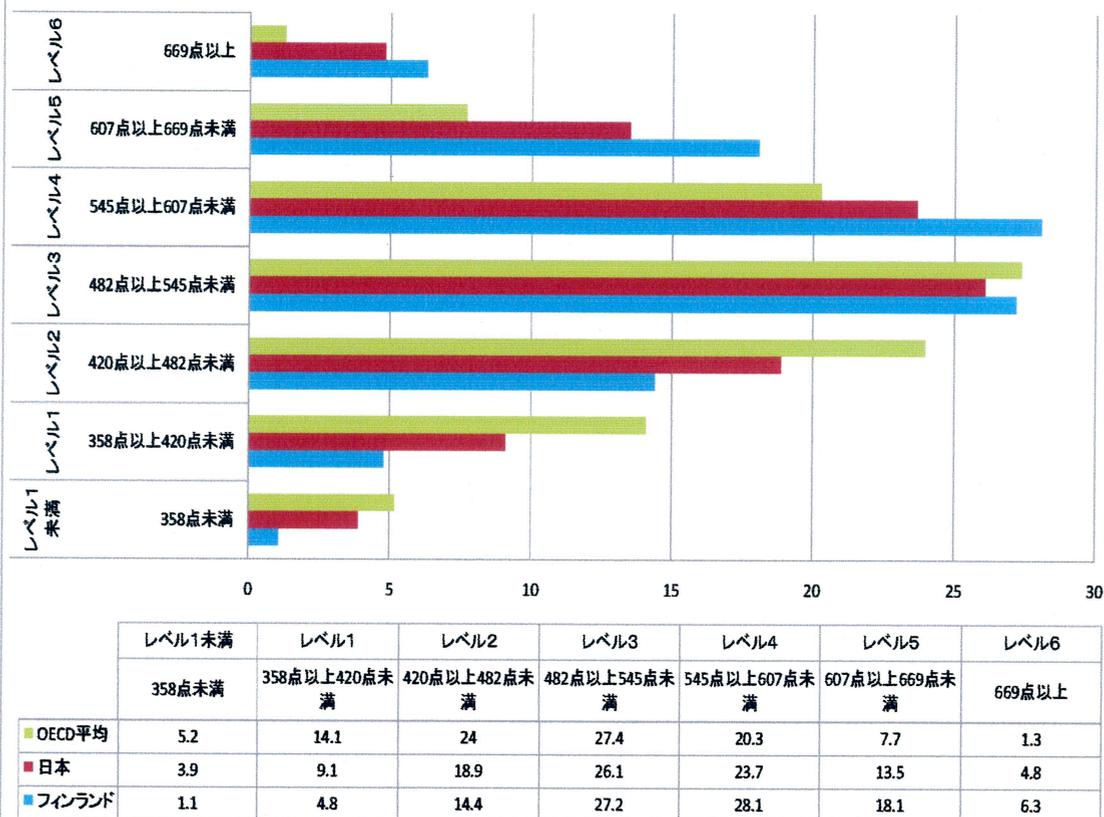


図 1 - 6 2006読解リテラシー

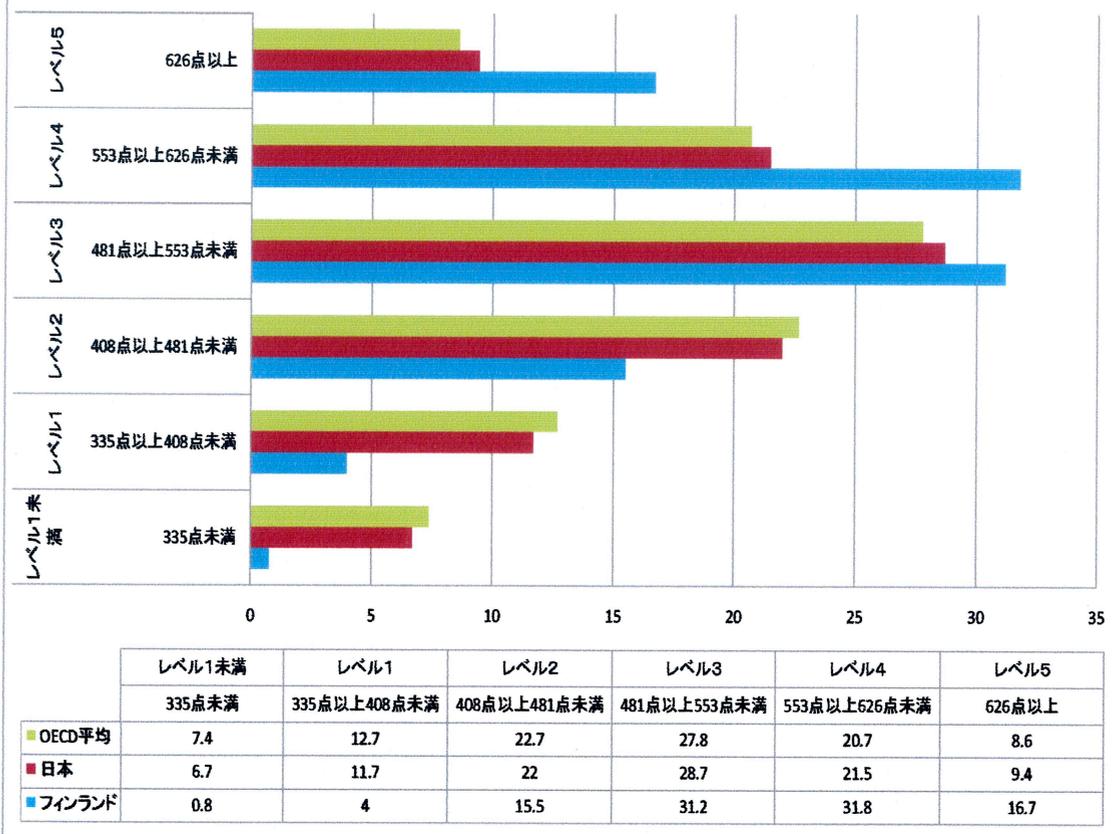
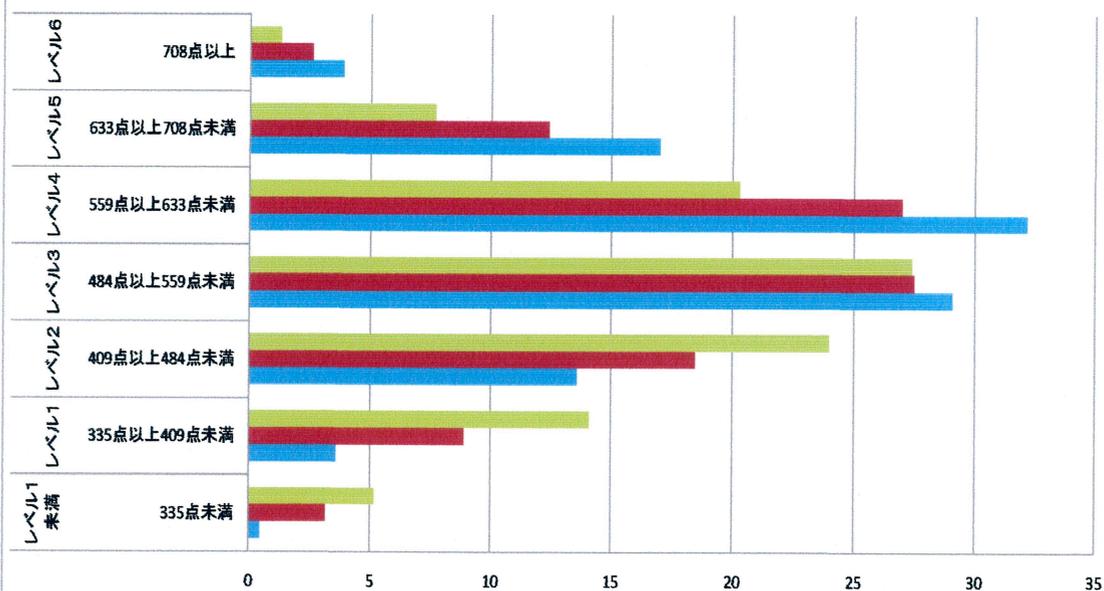


図 1 - 7 2006科学的リテラシー



	レベル1未満	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	レベル6
	335点未満	335点以上409点未満	409点以上484点未満	484点以上559点未満	559点以上633点未満	633点以上708点未満	708点以上
■ OECD平均	5.2	14.1	24	27.4	20.3	7.7	1.3
■ 日本	3.2	8.9	18.5	27.5	27	12.4	2.6
■ フィンランド	0.5	3.6	13.6	29.1	32.2	17	3.9

図 1 - 8 6.1エネルギー必要量に関する問1

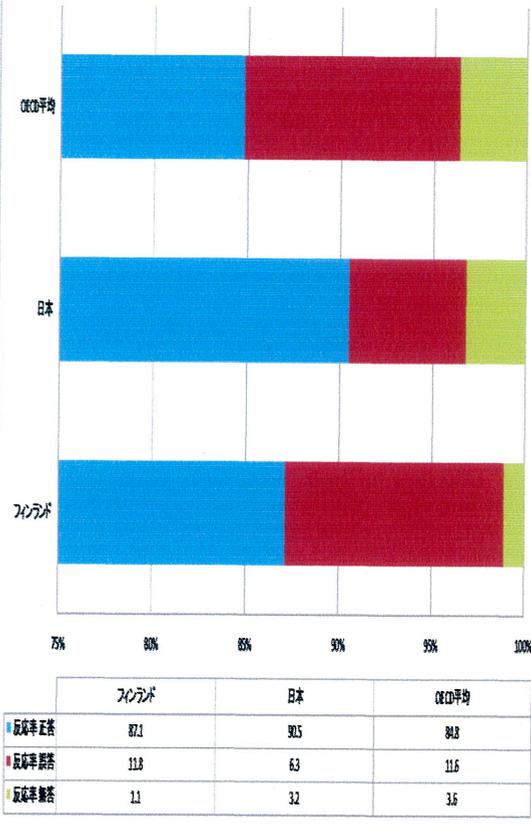


図 1 - 9 6.1エネルギー必要量に関する問2

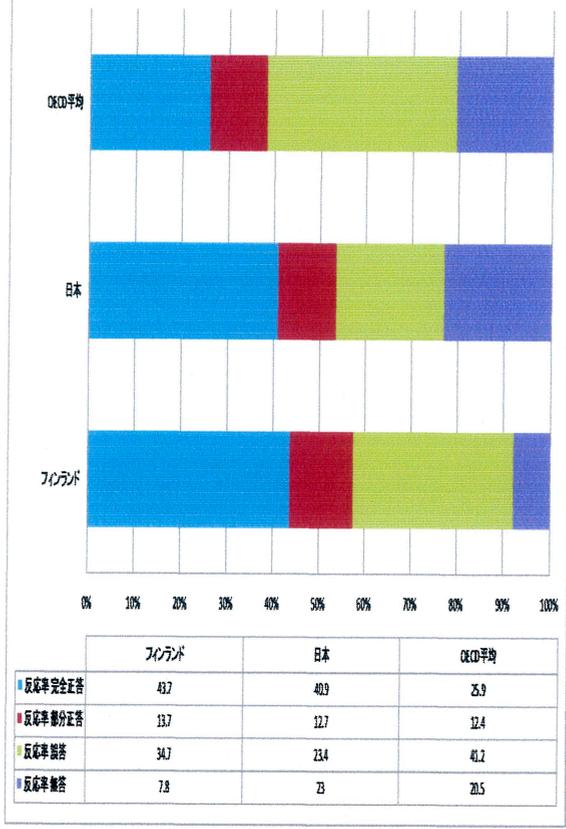


図 1 - 10 6.2休暇旅行に関する問1

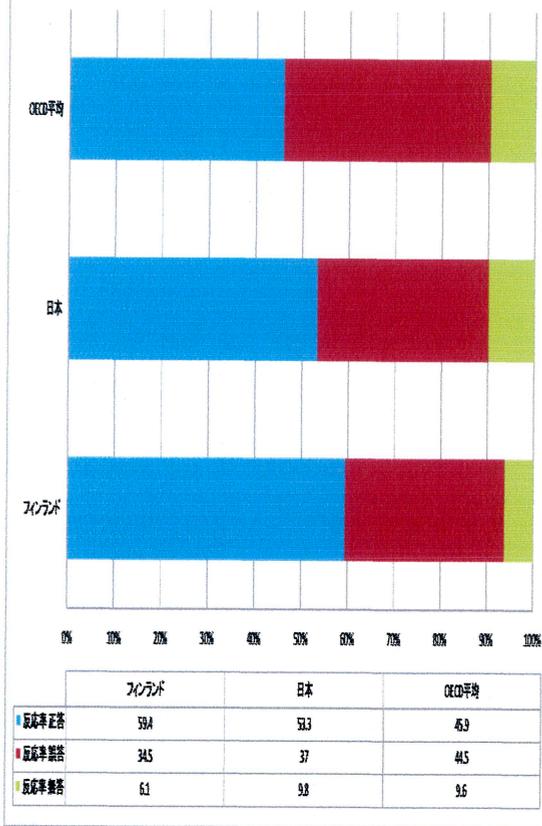


図 1 - 11 6.2休暇旅行に関する問2

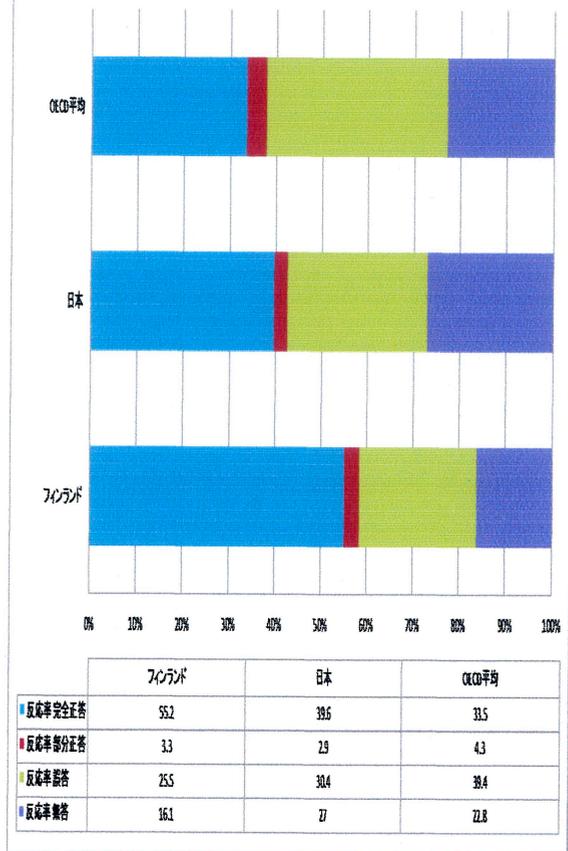
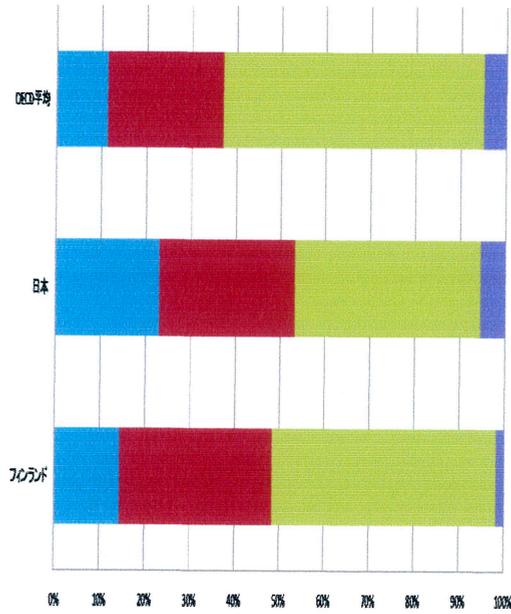
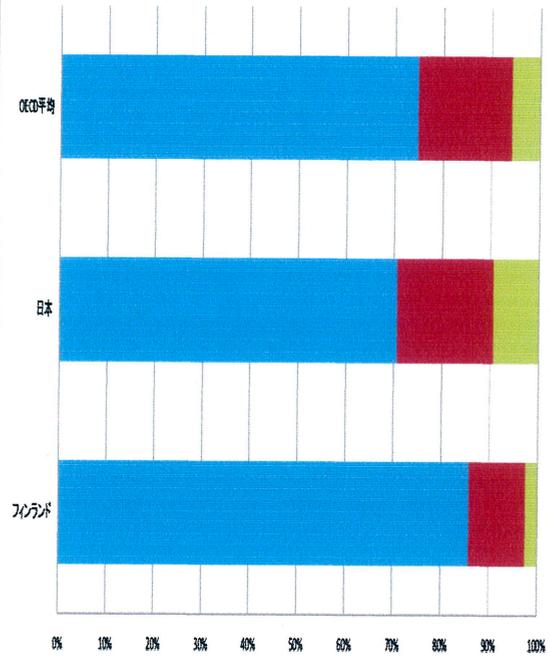


図 1 - 12 6.3交通網に関する問



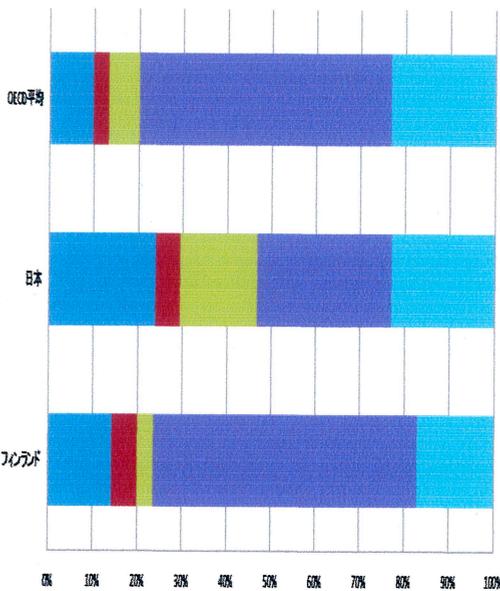
	フィンランド	日本	OECD平均
反応率完全正答	14.4	23.1	11.3
反応率部分正答	33.9	30.4	25.7
反応率誤答	49.9	41.4	58
反応率無答	1.7	5.5	5

図 1 - 13 6.4図書館システムに関する問1



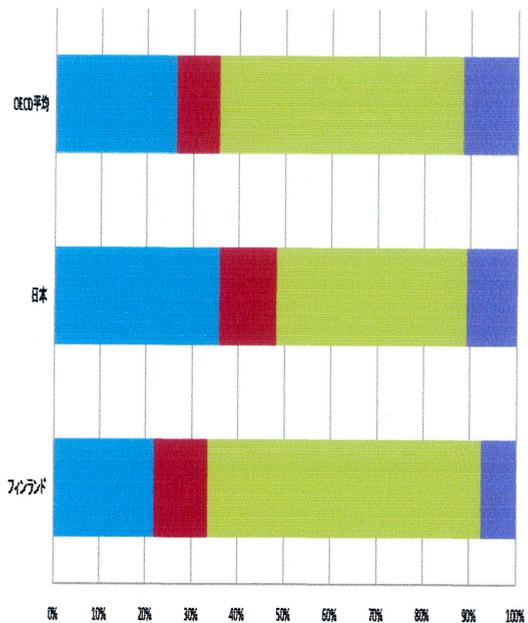
	フィンランド	日本	OECD平均
反応率正答	85.9	70.7	74.8
反応率誤答	11.6	20	19.5
反応率無答	2.5	9.3	5.7

図 1 - 14 6.4図書館システムに関する問2



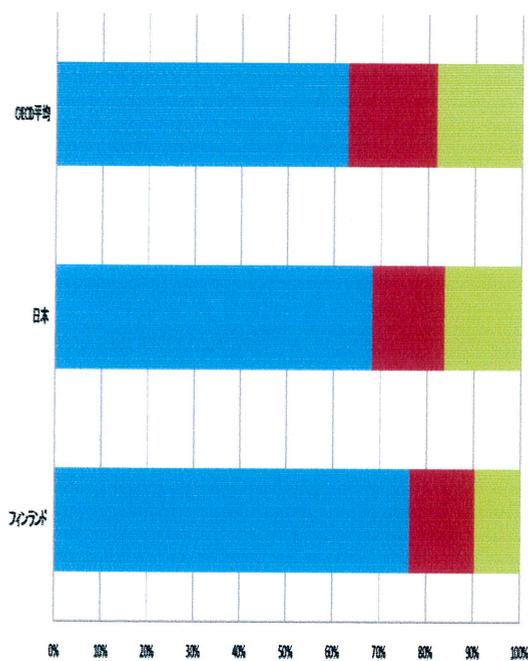
	フィンランド	日本	OECD平均
反応率完全正答9点	14.3	22.7	9.8
反応率部分正答2点	5.7	3.3	3.5
反応率部分正答1点	3.6	16.5	6.8
反応率誤答1点	59.4	28.7	56.8
反応率無答1点	17	21.8	23.2

図 1 - 15 6.6履修に関する問



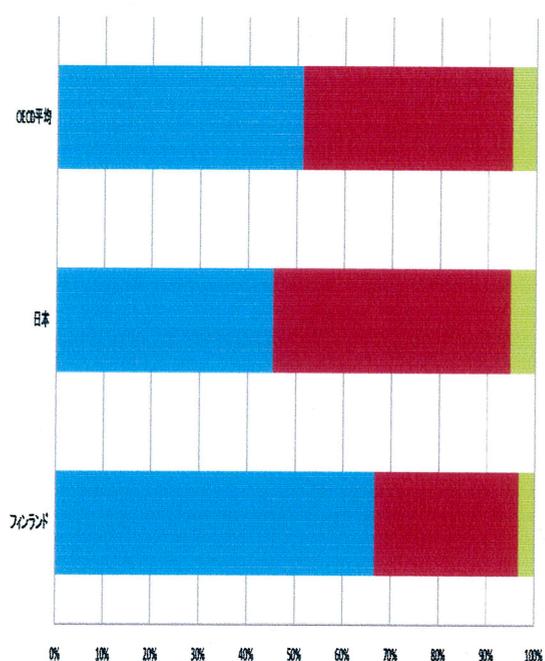
	フィンランド	日本	OECD平均
反応率完全正答	21.9	35.8	26.4
反応率部分正答	11.7	12.4	9.3
反応率誤答	59.1	41.1	52.7
反応率無答	7.4	10.7	11.6

図 1 - 16 6.7 読解に関する問1



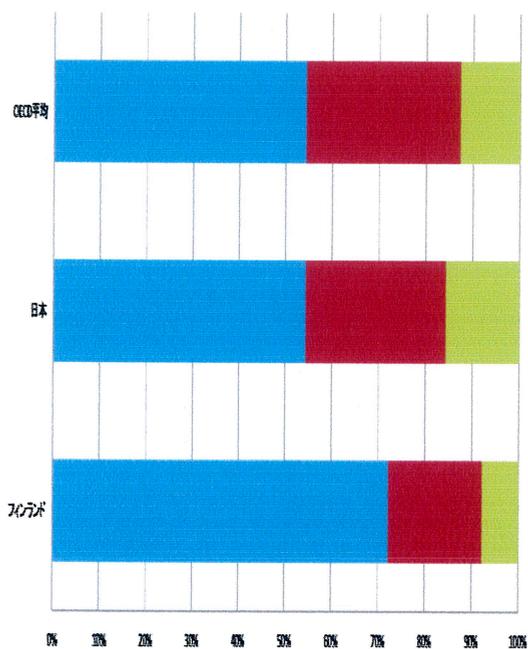
	フィンランド	日本	OECD平均
■ 正答率	76.5	68.3	62.9
■ 誤答率	13.9	15.4	19
■ 未答率	9.7	16.4	18.2

図 1 - 17 6.7 読解に関する問2



	フィンランド	日本	OECD平均
■ 正答率	66.7	45.3	51.3
■ 誤答率	30.1	49.6	43.8
■ 未答率	3.3	5.2	4.9

図 1 - 18 6.7 読解に関する問3



	フィンランド	日本	OECD平均
■ 正答率	72.2	54.5	54.7
■ 誤答率	20	29.9	33.9
■ 未答率	7.8	15.7	11.7

(出典：図1-1～1-4, 図1-8～1-18；国立教育政策研究所編、『生きるための知識と技能2 OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003 年調査国際結果報告書』。ぎょうせい, 2004.)

図1-5～1-7；国立教育政策研究所編、『生きるための知識と技能3 OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2006 年調査国際結果報告書』。ぎょうせい, 2007. の数値データより、筆者がグラフを作成。)

【資料】

6.1 エネルギー必要量に関する問題

資料1-1(6.1)

これは、ゼットランド国に住む人一人あたりのエネルギー必要量を満たすために、どのような食品を選んだらよいかに関する問題です。下の図は条件もさまざまな人々に、それぞれ適したエネルギー必要量をキロジュール (kJ) で表しています。

成人の1日のエネルギー必要量

年齢(歳)	活動レベル	男性	女性
		エネルギー必要量(kJ)	エネルギー必要量(kJ)
18~29	軽い	10660	8360
	普通	11080	8780
	重い	14420	9820
30~59	軽い	10450	8570
	普通	12120	8990
	重い	14210	9790
60以上	軽い	8780	7500
	普通	10240	7940
	重い	11910	8780

職業別活動レベル

軽い:

屋内営業担当者
会社員
主婦

普通:

教員
屋外営業担当者
看護師

重い:

建設労働者
肉体労働者
スポーツ選手

エネルギー必要量に関する問1

資料1-2(6.1)

藤田弘さんは45歳の教員です。藤田さんは、1日当たりどれだけのエネルギー量(kJ)を摂取したらよいでしょうか。

答え: キロジュール

広沢敬子さんは19歳の走り高跳び選手です。ある晩のこと、敬子さんは友人にレストランでの夕食に招待されました。これがそのメニューになります。

メニュー		敬子さんの推測による各料理のエネルギー量 (kJ)
スープ:	トマトスープ	355
	きのこのクリームスープ	585
メインディッシュ:	和風ステーキ	960
	スパイシーチキン	795
	ポークソテー	920
サラダ:	ポテトサラダ	750
	イタリアンサラダ	335
	シーフードサラダ	480
デザート:	ショートケーキ	1380
	チーズケーキ	1005
	ナタデココ	565
ミルクセーキ:	チョコレート	1590
	バニラ	1470

レストランには、次のような特別定額メニューもあります。

定額メニュー 50セット トマトスープ スパイシー・チキン ナタデココ

資料1-3(6.1)

エネルギー必要量に関する問2

資料1-4(6.1)

敬子さんは、毎日食べたものを記録しています。その日、夕食を食べる前までの彼女のエネルギー総摂取量は7520 kJでした。

敬子さんは、自分のエネルギー総摂取量が、毎日の適正量より500 kJ以上**下回ることも上回ることも**ないように気をつけています。

「定額メニュー」を食べたとき、敬子さんのエネルギー摂取量は、適したエネルギー必要量の±500 kJにおさまりますか。計算方法も書いてください。

6.2 休暇旅行に関する問題

資料1-5(6.2)

休暇旅行

これは、休暇旅行のために最適なルートを考える問題です。
図1と2は、この地域の地図と、各町間の距離を表しています。

図1： 町と町をつなぐ道路

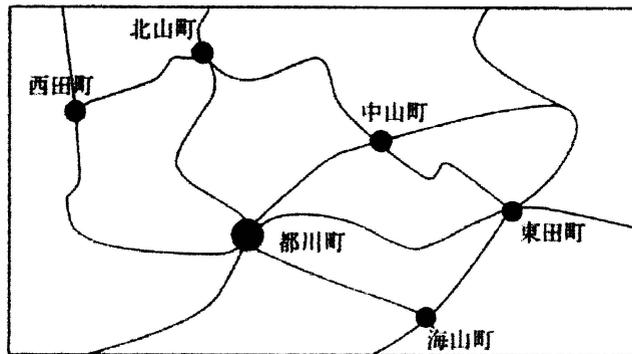


図2： 各町間の最短距離 (キロメートル)

都川町						
西田町	550					
北山町	500	300				
中山町	300	850	550			
東田町	500		1000	450		
海山町	300	850	800	600	250	
	都川町	西田町	北山町	中山町	東田町	海山町

休暇旅行に関する問 1

資料1-6(6.2)

東田町・西田町間の、道路上での最短距離を計算してください。

距離..... km

休暇旅行に関する問 2

資料1-7(6.2)

敏子さんは都川町に住んでいます。彼女は西田町と北山町に行きたいと考えています。彼女はいずれの日も**300キロメートルまで**しか移動できませんが、各町間のどこかで一泊キャンプし、旅の疲れを癒すことができます。

敏子さんは、どの町でも**2晩**は泊まることで、その町でまる1日観光ができるようにしたいと考えています。

下の図に、敏子さんが毎晩どこに泊まるか記入し、旅程表を完成させてください。

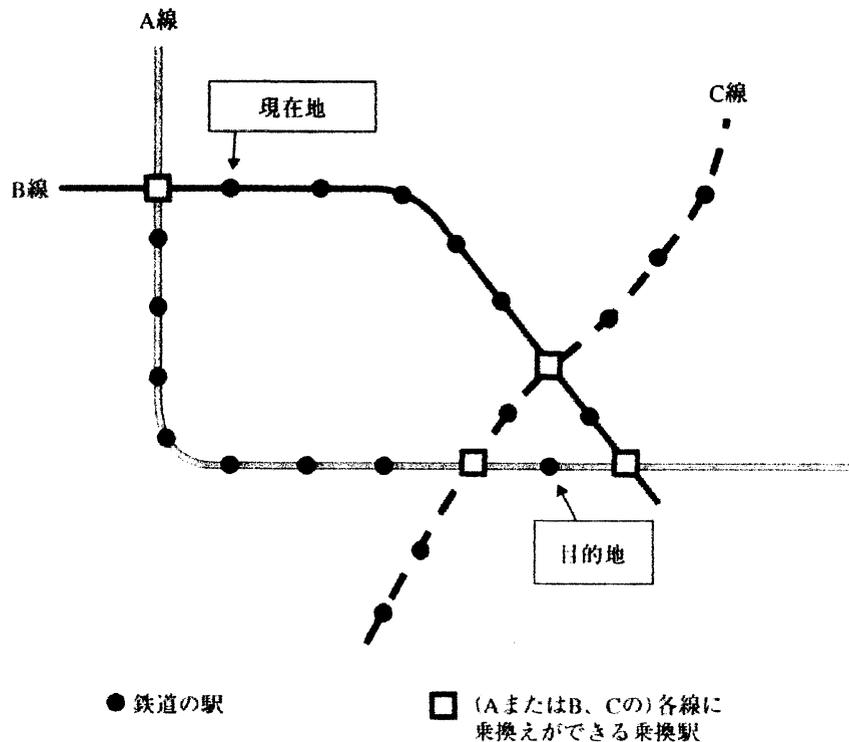
日	宿泊地
1	都川町・西田町間のキャンプ場
2	
3	
4	
5	
6	
7	都川町

6.3 交通網に関する問題

交通網

資料1-8(6.3)

下の図は、ゼットランド国内のある都市にある交通網を一部示したもので、鉄道路線が三つ敷かれています。現在地と目的地は次のように示されています。



料金は通過した駅の数で決まります(乗車した駅は数えません)。1駅ごとに1ゼットかかります。

隣接する2駅間の走行時間は約2分です。

乗換駅で、各線への乗換えにかかる時間は約5分です。

交通網に関する問

資料1-9(6.3)

図には、現在いる駅（「現在地」）と、これから行こうとする駅（「目的地」）が記されています。料金と所要時間を考えて最適なルートを、**図上**に示してください。
また、その際にかかる料金と、およその所要時間も記入してください。

料金： ゼット

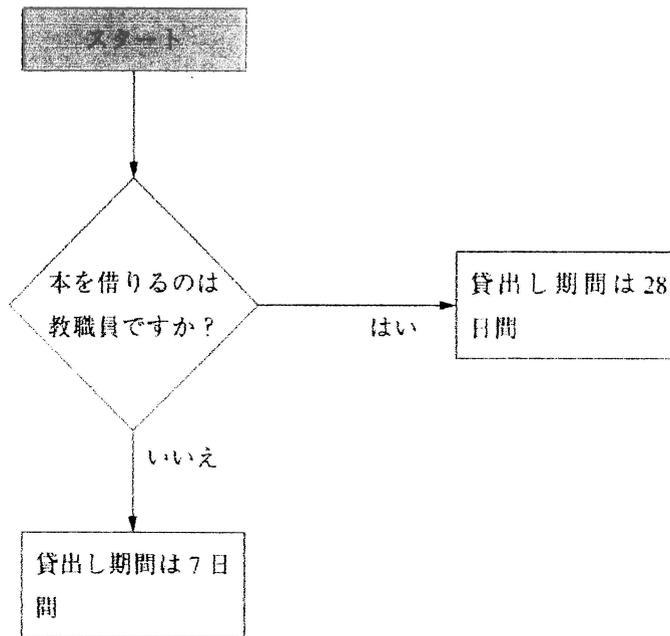
およその所要時間： 分

6.4 図書館のシステムに関する問題

図書館のシステム

資料1-10(6.4)

東高校は、図書の貸出しに簡易システムを採用しています。教職員は28日間、生徒は7日間、本を借りることができます。下の図は、この簡易システムを表した枝分かれ図です。



- 一方、西高校は、これに似ているが、もっと複雑な貸出しシステムを採用しています。
- ・「指定図書」と分類された図書の貸出し期間は2日間とする。
- ・指定図書リストに**のっていない**図書（雑誌を除く）については、教職員の貸出し期間を28日間、生徒の貸出し期間を14日間とする。
- ・指定図書リストに**のっていない**雑誌については、全員の貸出し期間を7日間とする。
- ・貸出し期間を過ぎた図書を返していない者は何も借りられない。

図書館のシステムに関する問1

資料1-11(6.4)

あなたは西高校の生徒で、図書館で借りたままの、貸し出し期間を過ぎた本がないとします。これから指定図書リストに**のっていない**本を借りたいとします。この場合貸し出し期間は何日になりますか。

答え： 日

図書室のシステムに関する問 2

資料1-12(6.4)

図書室の図書や雑誌を扱うチェック・システムを自動化できるように、西高校図書室システムの枝分かれ図を作成してください。作成するチェック・システムは、できるだけ効率の良いものにしてください(チェック段階をできるだけ少なくしてください)。どのチェック段階も分かれる枝は二つのみで、それぞれの枝に(「はい」「いいえ」などの)適切な表示をしてください。



「6.5 DESIGN BY NUMBERS に関する問題」は、省略。

6.6 履修計画に関する問題

資料1-13(6.6)

履修計画

3年間にわたる全課程で、次のような12科目を置いている高等専門学校があります。各科目とも、履修期間は1年間となっています。

	科目コード	科目名
1	M1	力学 レベル 1
2	M2	力学 レベル 2
3	E1	電子工学 レベル 1
4	E2	電子工学 レベル 2
5	B1	商業実務 レベル 1
6	B2	商業実務 レベル 2
7	B3	商業実務 レベル 3
8	C1	コンピュータ・システム レベル 1
9	C2	コンピュータ・システム レベル 2
10	C3	コンピュータ・システム レベル 3
11	T1	技術・情報管理 レベル 1
12	T2	技術・情報管理 レベル 2

履修計画に関する問

資料1-14(6.6)

どの生徒も、1年あたり4科目履修して、3年間で全12科目を終了することになっています。

生徒が上のレベルの科目を履修できるのは、その前年までに同じ科目で下のレベルを終了している場合のみです。たとえば、商業実務レベル3を履修することができるのは、商業実務のレベル1と2を終了してから、ということになります。

また、電子工学レベル1が履修できるのは、先に力学レベル1を終了してからとなっていて、電子工学レベル2も力学レベル2が終了した後ではじめて履修することができます。

どの年にどの科目を履修すればよいか考え、次の表を完成させてください。表には科目コードを記入してください。

	科目1	科目2	科目3	科目4
1年目				
2年目				
3年目				

6.7 灌漑に関する問題

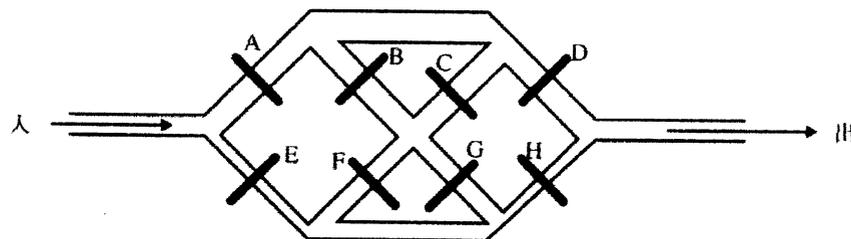
灌漑

資料1-15(6.7)

下の図は、各区画の農作物に水をやるための灌漑水路を表しています。水門Aから水門Hは、必要に応じて開閉できるようになっています。水門が閉じているとき、水はそこを流れません。

これは、灌漑水路からの流れを妨げている、塞がってしまった水門を見つける問題です

図1：灌漑水路



次郎さんは、水が必ずしも自分が思った場所に流れないことに気づきました。

彼は、どこかの水門が塞がっていて、スイッチを「開」にしても開かないのだと思いました。

灌漑に関する問 1

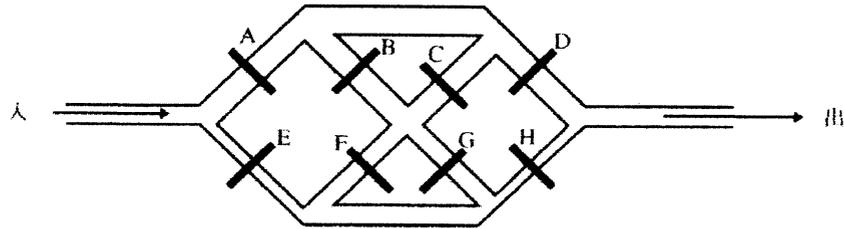
資料1-16(6.7)

次郎さんは、水門をテストするため、表1のような設定を試してみました。

表 1: 水門の設定

A	B	C	D	E	F	G	H
開	閉	開	開	閉	開	閉	開

表1で示された設定を基に、考えられる水の流れをすべて**下の図**に記入してください。すべての水門が設定通りに開閉しているのを前提条件とします。



灌漑に関する問 2

資料1-17(6.7)

次郎さんは、水門を表1の設定にしたとき、水が流れないということは、「開」に設定されたはずの水門のうち、少なくとも一つが塞がっているからだと気づきました。

次のような問題があった場合、水は全体を流れるでしょうか。「はい」または「いいえ」に○をつけてください。

考えられる問題	水は全体を流れますか？
水門 A が塞がっている。その他の水門はすべて、表1の通り開閉している。	はい / いいえ
水門 D が塞がっている。その他の水門はすべて、表1の通り開閉している。	はい / いいえ
水門 F が塞がっている。その他の水門はすべて、表1の通り開閉している。	はい / いいえ

灌漑に関する問 3

資料1-18(6.7)

次郎さんは、**水門 D** が塞がっているかどうかをテストしたいと考えました。

水門 D が「開」にセットしても塞がって開かなくなっているかどうかを調べられるような水門の設定を、下の表に記入してください。

水門の設定 (それぞれの欄に「開」または「閉」を記入)

A	B	C	D	E	F	G	H

(出典：国立教育政策研究所編、『生きるための知識と技能2 OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 2003 年調査国際結果報告書』、ぎょうせい、2004、330 頁～356 頁)

第2章 フィンランドのアントレプレナーシップ教育と

日本の初期社会科学習との共通する理念

第1節 フィンランドのコア・カリキュラムにおけるアントレプレナーシップ教育

フィンランドのリテラシー育成の秘密、そして、「間違ってもいい、やってみよう」「やる気がある」「挑戦してみよう」「根気よく取り組もう」という児童生徒の姿勢・態度を育成している教育の秘密をまず始めに指導要領の中に探すこととした。

フィンランドの指導要領（2004年版）は、全1冊（320頁）にまとめ上げられ、日本の各教科に分冊している指導要領の量に比べ、それぞれの項目の主旨を述べているにとどめている。

以下は、コア・カリキュラムの中の第7章第1節のアントレプレナーシップ教育の部分の翻訳と原文（但し、英文のもの）である。フィンランドのコア・カリキュラムの第7章は、「学習目的と教育の中核となる内容」であり、国語や各教科などが立ち並ぶ（26～28頁参照）。第7章自身が、21の節（セクション）に分かれ、7.1 統合的教科横断テーマの節（セクション）は、さらに、7つの部分から構成されている。

資料2-1

7.1 統合的教科横断テーマ INTEGRATION AND CROSS-CURRICULAR THEMES

この指導は、教科を分離したり、教科を統合したりする。

この指導を統合する目的は、児童生徒が事象を多面的に調べるようになることと、テーマを詳しく述べられるようになること、そして、全般的な教育目標を強調するようになることである。

教科横断テーマが、教育や教授の強調点を示している。

それらの目的と内容は、多数の教科に取り入れられ、教育や指導を統合する。

それらを通して、現代の教育の挑戦が求められている。

この部分（7.1）は、教科横断テーマを示している。しかし、これらのテーマは、いろいろな教科で、また特性を示した見地から、児童生徒の発達上の段階によって必

要とされる方法で実施される。

このカリキュラムを明確に述べるなら、教科横断テーマは、中心科目にも選択科目にも含まれており、集会のような共同の行事にも含まれており、学校での作業的文化であることは明白である。

Instruction may be separated into subjects or integrated.

The objective of integrating instruction is to guide pupils in examining phenomena from the perspectives of different fields of knowledge, thereby elaborating themes and emphasizing general educational goals.

Cross-curricular themes represent central emphases of the educational and teaching work.

Their objectives and contents are incorporated into numerous subjects; they integrate the education and instruction. Through them, the educational challenges of the time are also met.

This section depicts the cross-curricular themes, but they are implemented in the various subjects, from the perspectives characteristic of those subjects, and in a manner required by the pupil's developmental phase.

In formulating the curriculum, cross-curricular themes are to be included in the core and optional subjects and in joint events such as assemblies, and are to be manifest in the school's operational culture.

- 1 人間としての成長 Growth as a person
- 2 文化的なアイデンティティと国際主義 Cultural identity and internationalism
- 3 メディアの技能とコミュニケーション Media skills and communication
- 4 参加する市民像と起業家精神 Participatory citizenship and entrepreneurship

「参加する市民像と起業家精神」の教科横断テーマの目標は、児童生徒が「様々な参加者の観点から社会を認識すること」「市民的な参加に必要な能力を開発させること」「起業的な方法のための土台を作ること」を手伝うことである。

The goals of the "Participatory citizenship and Entrepreneurship" cross-curricular theme are to help the pupil perceive society from the viewpoints of different players, to develop the capabilities needed for civic involvement, and to create a foundation for entrepreneurial methods.

目的 OBJECTIVES

児童生徒は、社会の機能性の見地から、学校や役所、企業の世界、いろいろな組織が「重要であること」や「労働していること」や「要求していること」を理解するようになる。

児童生徒は、自分自身の批判的意見から、様々なタイプの専門的知識を形成することを学ぶ。

児童生徒は、適切に参加して、地域や学校の中で分担されたことを積極的に学ぶ。

児童生徒は、変化や不確実性、対立に直面して、取り扱うことを学び、また、やる気と進めていく力の感覚を持って行動をすることを学ぶ。

目標を達成するために、児童生徒は、革新的に辛抱強く行動をし、自分自身の個人的な行動と自分の行った影響を評価することを学ぶ。

児童生徒は勤労生活と起業家的活動を知るようになり、そして個人と社会におけるそれらの重要性を理解するようになる。

The pupils will come to understand the importance, workings, and needs of the school community, the public sector, the business world and organizations, from the perspective of the functionality of society.

中核となる内容 CORE CONTENTS

- ・ 学校、役所、企業の世界といろいろな組織の間の労働活動と分業についての基本的な情報
- ・ 共同体と社会での民主政治の重要性
- ・ 市民社会における参加と影響を与えることの手段
- ・ 自分や世の中全体の福祉を促進するネットワーク
- ・ 自分の学校と身の周りの環境の中で影響を及ぼすように参加し努力することや自分の行動の影響力を評価すること
- ・ 起業家精神と社会の重要性、職業としての起業家の基本的な情報、職業生活の紹介
- ・ basic information about the activity of, and division of labour between, the school community, the public sector, the business world, and organizations
- ・ the importance of democracy in the community and society
- ・ various means of participation and influence in civic society
- ・ networking to promote one's own and general welfare
- ・ participating and exerting an influence in one's school and living environment, and evaluating the impact of one's actions
- ・ entrepreneurship and its importance to society, basic information on entrepreneurship as a vocation, and getting an introduction to working life

5 環境や福祉、持続可能な未来に対する責任

Responsibility for the environment, well-being, and a sustainable future

6 安全と交通 Safety and traffic

7 技術と個人 Technology and the individual

(出典：FINNISH NATIONAL BOARD OF EDUCATION. "NATIONAL CORE CURRICULUM FOR BASIC EDUCATION 2004". Vammalan Kirjapaino Oy, 2004.) (フィンランドのコア・カリキュラムは、英語訳が「FINNISH NATIONAL BOARD OF EDUCATION」から出ている。)

第2節 フィンランドのコア・カリキュラムの構成

フィンランドの2004年版コア・カリキュラム(資料2-2)は、第7章に至るまでに、第1章カリキュラム、第2章教育の規定の出発点、第3章指導の実施、第4章学習に対する一般的な援助、第5章特別支援の必要な児童生徒への指導、第6章文化的な言語グループの指導と続き、第8章児童生徒の評価、第9章特別な教育の任務のとおり指導あるいは特殊教育のシステムあるいは指導へと続いている。

資料2-2

- 1 カリキュラム CURRICULUM
 - 1.1. カリキュラムの定式化 Formulation of the curriculum
 - 1.2. カリキュラムの内容 Content of the curriculum
- 2 教育の規定の出発点 STARTING POINTS FOR PROVISION OF EDUCATION
 - 2.1. 基礎教育の土台となる価値 Underlying values of basic education
 - 2.2. 基礎教育の任務 Mission of basic education
 - 2.3. 基礎教育の構造 Structure of basic education
- 3 指導の実施 IMPLEMENTATION OF INSTRUCTION
 - 3.1. 学習の概念 The conception of learning
 - 3.2. 学習環境 Learning environment
 - 3.3. 作業的な文化 Operational culture
 - 3.4. 活動の方法 Working approaches
- 4 学習に対する一般的な援助 GENERAL SUPPORT FOR STUDIES
 - 4.1. 家と学校間の協力 Cooperation between home and school
 - 4.2. 学習計画 The learning plan
 - 4.3. 上級学校と職業への指導の実施 Provision of educational and vocational guidance
 - 4.4. 補習的な教育 Remedial teaching
 - 4.5. 児童生徒の福祉 Pupil welfare
 - 4.6. クラブ活動 Club activities
- 5 特別支援を必要とする児童生徒への指導
INSTRUCTION OF PUPILS NEEDING SPECIAL SUPPORT
 - 5.1. 支援の異なった様式 Different modes of support
 - 5.2. 定時制の特別支援教育 Part-time special-needs education
 - 5.3. 特別支援教育に登録されたか移された児童生徒への指導
Instruction of pupils enrolled in or transferred into special-needs education
 - 5.4. 個別の教育の計画 Individual educational plan
 - 5.5. 活動エリアよっての指導の実施 Provision of instruction by activity area
- 6 文化的な言語グループの指導
INSTRUCTION OF CULTURAL AND LANGUAGE GROUPS
 - 6.1. サミー The Sami
 - 6.2. ロマニ Romanies
 - 6.3. 手話ユーザー Sign language users
 - 6.4. 移民 Immigrants
- 7 学習目的と教育の中核となる内容

LEARNING OBJECTIVES AND CORE CONTENTS OF EDUCATION

7.1. 統合的教科横断テーマ Integration and cross-curricular themes

7.2. 母国語と第2国語における学習

Studies in mother tongues and the second national language

7.3. 母国語と文学 Mother tongue and literature

母国語としてのフィンランド語 Finnish as the mother tongue

母国語としてのスウェーデン語 Swedish as the mother tongue

母国語としてのサミー語 Sami as the mother tongue(Eatnigiella)

母国語としてのロマニ語 Romany as the mother tongue

母国語としてのフィンランド語の手話 Finnish sign language as the mother tongue

他の母国語 Other mother tongue

第2言語としてのフィンランド語 Finnish as a second language

第2言語としてのスウェーデン語 Swedish as a second language

サミー語を話す人のためのフィンランド語 Finnish for Sami-speakers

フィンランド語の手話のユーザーのためのフィンランド

Finnish for users of Finnish sign language

フィンランド語の手話のユーザーのためのスウェーデン語

Swedish for users of Finnish sign language

7.4. 第2国語 Second national language

スウェーデン語 Swedish

フィンランド語 Finnish

7.5. 外国語 Foreign languages

7.6. 数学 Mathematics

7.7. 環境と自然科学 Environmental and natural studies

7.8. 生物と地理 Biology and geography

7.9. 物理と化学 Physics and chemistry

7.10. 健康教育 Health education

7.11. 宗教 Religion

ルター派 Lutheranism

ギリシャ正教 The Orthodox religion

他の宗教 Other religion

7.12. 倫理 Ethics

7.13. 歴史 History

7.14. 社会科 Social studies

7.15. 音楽 Music

7.16. 図画 Visual arts

7.17. 工作 Crafts

7.18. 体育 Physical education

7.19. 家政科 Home economics

7.20. 選択科目 Optional subjects

7.21. 上級学校へと職業への指導 Educational and vocational guidance

8 児童生徒の評価 PUPIL ASSESSMENT

8.1. 学習の形成的評価 Assessment during the course of studies

8.2. 最終の評価 Final assessment

8.3. 証明書と報告 Certificates and reports

9 特別な教育の任務のとおり の指導あるいは特殊教育のシステムあるいは指導

INSTRUCTION IN ACCORDANCE WITH A SPECIAL EDUCATIONAL TASK OR SPECIAL PEDAGOGICAL SYSTEM OR PRINCIPLE

9.1. 国語の中に外国語を含める教育

Instruction in a foreign language and language-immersion instruction in the national languages

9.2. 国際言語学校 International language schools

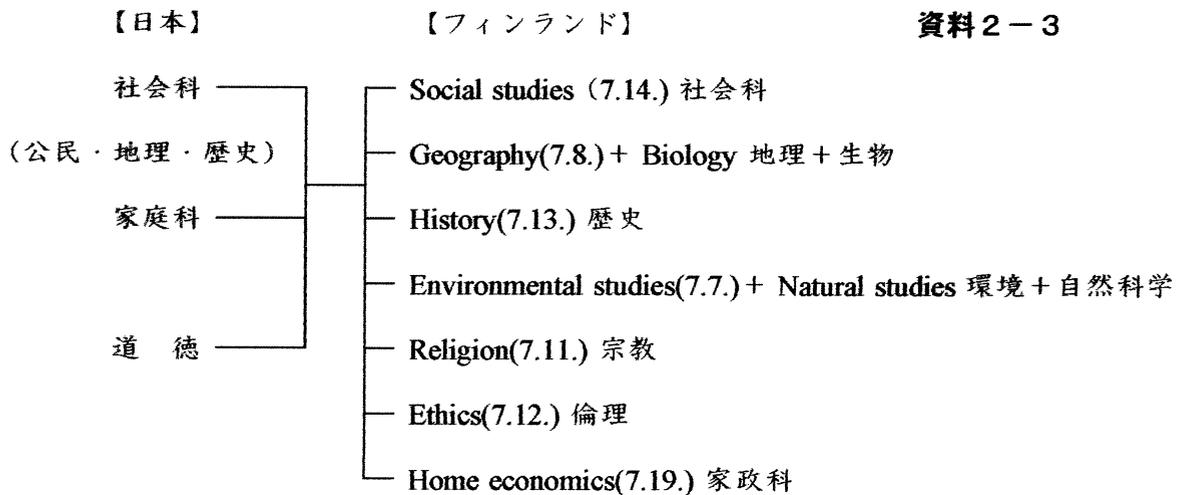
9.3. スタイナー教育の指導 Steiner-pedagogical instruction

(出典：FINNISH NATIONAL BOARD OF EDUCATION. "NATIONAL CORE CURRICULUM FOR BASIC EDUCATION 2004". Vammalan Kirjapaino Oy, 2004.)

第3節 フィンランドと日本の社会科

フィンランドの2004年版と日本の2008年版指導要領の教科を比べると、日本の小学校では、国語・社会・算数・理科・生活・音楽・図画工作・家庭・体育・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動の授業を行うことになっている。

特に、社会科関連の教科は、下のような相関関係である。



フィンランドの基礎学校(7才~15才)の社会科は、日本の中学校の社会科を含めて、見比べねばならないところもあるが、日本の小学校社会科と比べ、多種の教科に分かれている。日本の社会科が細かく分かれていないのは、戦後作られた新しい教科(社会科)であったことに由来すると考えられる。戦後社会科は、歴史(国史)を否定しなければならぬ暗い過去をもち、全体主義から民主主義に国全体を脱却するための重要な教科だったからである。それ故、初期の社会科は、「総合」科の形をとり、民主主義の国の建設を担っていく教科として創設されたのである。

日本の初期社会科とフィンランドのアントレプレナーシップ教育とは、50年の隔たりがあるが、共に、その教育理念の源泉は、同じところにあると考えている。以下、同じところや似ているところに印（青の）をしてみた。日本の1947版の社会科の目標の文末に「ア）」～「ス）」記号を付け、その目標がフィンランドの目標のどれに相当するかを示した。

資料2-4

日本の初期社会科教育	フィンランドのアントレプレナーシップ教育
<p>1947（昭和22）年版学習指導要領（試案）社会科の目標</p> <p>社会科の目標は、暫定的ではあるが、一応教育の一般目標に基づいて、次のように考えられるであろう。小学校の六箇年に対しては、各学年ごとに、これに基づく学年の目標を示し、中学に対しては、各単元ごとに、これに基づく単元の目標を示すことにした。教師は、よくこれらを通読し、その意味を適確に理解するように努められたい。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 生徒が、人間としての自覚を深めて人格を発展させるように導き、社会連帯性の意識を強めて、共同生活の進歩に貢献するとともに、礼儀正しい社会人として行動するように導くこと。ア)エ)オ) カ) 2. 生徒に各種の社会、すなわち家庭・学校及び種々の団体について、その構成員の役割と相互の依存関係とを理解させ、自己の地位と責任とを自覚させること。エ)カ) 3. 社会生活において事象を合理的に判断するとともに、社会の秩序や法を尊重して行動する態度を養い、更に政治的な諸問題に対して宣伝の意味を理解し、自分で種々の情報を集めて、科学的総合的な自分の考えを立て、正義・公正・寛容・友愛の精神をもって、共同の福祉を増進する関心と能力とを発展させること。カ)ケ)コ)ク)ク) 4. 生産・消費・交通・運輸等の自然的社会的条件を理解させること。 5. 生徒が日常接触する自然的並びに社会的環境について、科学的に観察する 	<p>”NATIONAL CORE CURRICULUM FOR BASIC EDUCATION 2004”</p> <p>4 参加する市民像と起業家精神</p> <p>Participatory citizenship and entrepreneurship</p> <p>「参加する市民像と起業家精神」の教科横断テーマの目標は、児童生徒が「様々な参加者の観点から社会を認識すること」「市民的な参加に必要な能力を開発させること」「起業的な方法のための土台を作ること」を手伝うことである。⁷⁾</p> <p>目的</p> <p>児童生徒は、社会の機能性の見地から、学校や役所、企業の世界、いろいろな組織が「重要であること」や「労働していること」や「要求していること」を理解するようになる。¹⁾</p> <p>児童生徒は、自分自身の批判的意見から、様々なタイプの専門的知識を形成することを学ぶ。²⁾</p> <p>児童生徒は、適切に参加して、地域や学校の中で分担されたことを積極的に学ぶ。³⁾</p> <p>児童生徒は、変化や不確実性、対立に直面して、取り扱うことを学び、また、やる気と進めていく力の感覚を持って行動をすることを学ぶ。⁴⁾</p> <p>目標を達成するために、児童生徒は、革新的に辛抱強く行動をし、自分自身の個人的な行動と自分の行った影響を評価することを学ぶ。⁵⁾</p> <p>児童生徒は勤労生活と起業家的活動を知るようになり、そして個人と社会におけるそれらの重要性を理解するようにな</p>

能力を養うこと。

6. 世界の自然的環境及び文化は、地域によってさまざまに異なるものであること、並びに各地の人間生活は、その文化的条件のもとに自然に適応しながら営まれていることを理解させること。
7. 各地域・各階層・各職域の人々の生活の特質を理解させ、国内融和と国際親善に貢献する素地を養うこと。^(イ)サ)
8. 各地の資源・自然美及び人工美の価値を知って、これを愛護するとともに、進んでこれを開発し、創造する能力を養うこと。
9. 社会生活が常に発展するものであることを知り、過去の事績を背景として現代の特質を理解し、将来の方向を見わたす能力を養うこと。^{ホ)ツ)}
10. 各種の職業についてその社会生活に対する意義を十分理解し、他人の職業を尊重する態度を強め、自己の職業の選択を正しく行い、能率の高い職業活動のできる能力を養うこと。^(イ)キ)ス)
11. 社会生活における勤労の価値を理解するとともに、勤労によって産業の発展に寄与する能力、及び勤労を尊ぶ態度を養うこと。^{キ)ス)}
12. 自分の健康を保ち、これを増進するために必要な知識を学び、それに基づいて健康に留意する習慣と態度とを養い、更に社会一般の保健に関心を持ち、一般の健康状態を向上させる態度を作り上げること。
13. 宗教の社会生活における意義を理解すること。
14. 娯楽や運動の自然的並びに社会的背景を知って、これらの発達を理解すること。
15. ある主題について、討議して学習を進め、人々に会って知識を得る習慣を作り、社会生活に関して、自分で調査し、資料を集め、記録・地図・写真統計等を利用し、またこれを自分で作製する能力を養うこと。

る。^{キ)}

中核となる内容

- ・学校、役所、企業の世界といろいろな組織の間の労働活動と分業についての基本的な情報^{ア)}
- ・共同体と社会での民主政治の重要性^{カ)}
- ・市民社会における参加と影響を与えることの手段^{コ)}
- ・自分や世の中全体の福祉を促進するネットワーク^{ク)}
- ・自分の学校と身の周りの環境の中で影響を及ぼすように参加し努力することや自分の行動の影響力を評価すること^{ク)}
- ・起業家精神と社会の重要性、職業としての起業家の基本的な情報、職業生活の紹介^{ク)}

(第2章第1節から再掲)

このように、アントレプレナーシップ教育という、一見絞られたテーマの学習であるが、アントレプレナーシップ教育は、日本の初期小学校社会科が目指していたものに近いと考えている。次章では、実際の取組を比較しながら、分析していくこととする。

第3章 フィンランドのアントレプレナーシップ教育と

日本の1947年版小学校指導要領（試案）の実践例

第1節 フィンランドのアントレプレナーシップ教育の実践例

(1) Lyseonmäen 校，ヘイノラ（基礎学校7～9年）の実践例

下は、フィンランド語のホームページを筆者が翻訳したものである。

Lyseonmäen 校，ヘイノラ

資料3-1

・1999～2002年に行われたアントレプレナーシップ教育プロジェクト

プロジェクトの目的は、取り巻いている社会を教育するためであり、今日的なビジネス生活に慣れさせるためである。同じように、このプロジェクトは、生徒たちが企業の必要条件（自分を思い通りに運ぶ力、勤勉であること、正直であること、*hyvätapaisuuden*）を *sisäistäisivät* する現実を狙っている。さらに、このプロジェクトは、学校と地域とのビジネス協力が続く方法を探究するように計画された。アントレプレナーシップ教育プロジェクトで、ビジネスと市が対等になるフィンランドの地方自治体の交流の一部である。

1999年春、7年生のクラスに、発展する起業家教育のクラスを作ることを決めました。下級生には未来に行われるクラスとして、興味を持った生徒には、別のクラスのなかで、報告されました。クラスは60人の生徒から11人の少年と11人の少女を選びました。学校や親たちのビジネスの背景の中に、生徒たちの今までの成功は確認されていません。

・パートナー

ビジネス教師、カリキュラム管理者、歴史と社会科教師、校長で導かれたプロジェクト。ビジネス教師は、仕事をするクラスの管理者。教師たちは、訓練の日々によって組織化されたいくつかの生活共同体に参加しました。歴史と社会科の教師は、アントレプレナーシップ教育の星のような教員訓練によって組織化された *Opeko* に関係していました。また、仕事は、ヘイノラの親切な *yriityksiä* に関係していました。ヘイノラ市の *elinkeinoasiamies* は、獲得ビジネスを後援するのを助けてくれました。さもなければ、*elinkeinoasiamies* は、プロジェクトに関係していませんでした。これらのほかに、親たちは、夜に活発な役を演じました。

・クラス間の起業家教育のアクション7

第7学年は、デザインの学生の間、実施されました。後援してもらっている企業”*Ylimääräinen vanhempainilta* (超過の親の晩)”と打ち合わせをし、森林旅行で組織化され後援してもらっているビジネス”*Schauman Woodin*”をすべて訪問し、資金の研究

をした。市場の売り出し，組合を祝っている会社のこどもたちのクリスマス会を後援しているクリスマス公演。

・クラス間の起業家教育のアクション 8

第8学年は，**valinnaiskurssi** (1vt)の若い起業家たちの間に，実施されました。テト週間の後援会社である”**Ylimääräinen vanhempainilta**(超過の親の晩)”，学校を保持するためのキオスク，後援したもっている会社でありファンドの”**Jyväskylän Puumessuille**”に参加。市場の売り出し，組合を祝っている会社のこどもたちのクリスマス会を後援しているクリスマス公演。

・クラス間の起業家教育のアクション 9

第9学年は，**valinnaiskurssi** (1vt)の若い起業家たちの間に，実施されました。資金を集めるのために後援してもらっている会社のプレゼンテーションをする生徒や”**Ylimääräinen vanhempainilta**(超過の親の晩)”会社のプレゼンテーションによって作られた生徒。市場の売り出し，組合を祝っている会社のこどもたちのクリスマス会を後援しているクリスマス公演，2002年5月に”**sählyturnauksen**” コーヒー組合，アーラントとストックホルムへの調査旅行。資金調達のために学生が成立した調査旅行(大多数)，(**oppilaittain** からさまざま)生徒自身の貢献，交付金 **Koulutuslautakunnan** と学校の財政貢献(保険とバス旅行)。

Lyseonmäen koulu, HEINOLA

Yrittäjyyskasvatushanke vuosina 1999-2002

Projektin tavoitteena oli lähentää koulua ympäröivään yhteiskuntaan ja tutustuttaa oppilaat nykypäivän yritys-elämään. Projektilla pyrittiin myös siihen, että oppilaat sisäistäisivät yrittäjyyden vaatimukset: oma-aloitteisuuden, ahkeruuden, rehellisyyden ja hyvätapaisuuden. Lisäksi projektin tarkoituksena oli etsiä keinoja, joilla koulun ja lähialueen yritysten yhteistoimintaa voitaisiin projektin jälkeen jatkaa. Hanke kuuluu Suomen Kuntaliiton koordinoimaan Yrittäjyys ja kunnat -yrittäjyyskasvatushankkeeseen.

Keväällä 1999 kouluun päätettiin perustaa yrittäjyyskasvatusluokka, 7 Y-luokka. Ala-asteen oppilaita informoitiin tulevasta luokasta ja halukkaat oppilaat ilmoittautuivat erillisellä lomakkeella. Luokalle pyrki 60 oppilasta, joista valittiin 11 poikaa ja 11 tyttöä. Oppilaiden aiempaa koulumenestystä tai vanhempien yritystaustaa ei kartoitettu.

Yhteistyötahot

Projektin vetäjinä toimivat kaupallisten aineiden opettaja, opinto-ohjaaja, historian ja yhteiskuntaopin opettaja ja rehtori. Kaupallisten aineiden opettaja toimi samalla luokanvalvojana. Opettajat osallistuivat joillekin kuntainliiton järjestämille koulutuspäiville. Historian ja yhteiskuntaopin opettaja oli mukana OPEKO:n järjestämässä Yrittäjyyskasvatuksen Tähtiopettaja -koulutuksessa. Toiminnassa lisäksi mukana Heinolalaisia yrityksiä. Heinolan kaupungin elinkeinoasiamies auttoi kummiyritysten hankinnassa. Muuten elinkeinoasiamies ei ollut projektissa mukana. Näiden lisäksi oppilaiden vanhemmat osallistuivat aktiivisesti vanhempainiltoihin.

Yrittäjyyskasvatustoiminta 7. luokan aikana:

7.luokan aikana toteutettiin Suunnittelu oppilaiden kanssa, Suunnittelupalaveri

くummiyritysten kanssa, Ylimääräinen vanhempainilta, Vierailut kaikissa kummiyrityksissä, Schauman Woodin järjestämä metsäretki sekä Rahankeräys opintoretkeä varten: torimyynti, pikkujoulu esiintymiset, kummiyrityksen lasten pikkujoulujuhlan järjestäminen

Yrittäjyyskasvatustoiminta 8. luokan aikana:

8. luokan aikana toteutettiin Nuori yrittäjä - valinnaiskurssi (1vt), Ylimääräinen vanhempainilta, Oppilaiden ylimääräinen tet-viikko kummiyrityksissä, Kioskin pitäminen koululla, Osallistuminen Jyväskylän Puumessuille kummiyrityksen kanssa sekä Rahankeräys: torimyynti, pikkujoulu esiintymiset, kummiyrityksen lasten pikkujoulujuhlan järjestäminen

Yrittäjyyskasvatustoiminta 9. luokan aikana:

9.luokan aikana toteutettiin Nuori yrittäjä -valinnaiskurssi (1vt), Oppilaiden tekemä luokan esittely kummiyrityksille, Oppilaiden tekemät yritys esittelyt, Ylimääräinen vanhempainilta, Rahankeräys: torimyynti, kummiyrityksen lasten pikkujoulujuhlan järjestäminen, kummiyrityksen sählyturnauksen kahvituksen järjestäminen ja lopuksi Opintoretki Ahvenanmaalle ja Tukholmaan toukokuussa 2002. Opintoretken rahoitus koostui Oppilaiden yhdessä keräämästä rahoituksesta (suurin osa), Oppilaiden omasta rahoitusosuudesta (vaihteli oppilaittain), Koulutuslautakunnan avustuksesta sekä Koulun rahoitusosuudesta (vakuutukset ja linja-automatkat)

(出展 : <http://www.edu.fi/SubPage.asp?path=498,1329,17908,17911,21602,21618,22477>)

(2) Kauhajärvi での起業家教育の実践例

資料 3 - 2

Kauhajärvi は、かなり多くの企業のある村です。私たちは、児童生徒が親が何をしているかを知るべきであると思いました。そこで、私たち、1993年に起業家教育を始めたのです。

Kauhajärvi is a village, where are quite a lot enterprises. We thought that pupils should know what their parents do. So we started enterprise education in 1993.

最初に、私たちは会社を訪問して、インタビューをして、エッセーを書いて、そして、小さい新聞を作りました。特に第5学年と第6学年のクラスで、この間、私たちは繰り返して同じことをしました。数年間、児童生徒は、これらの会社でいくつかの実践的な訓練を行っています。

At first we visited companies, made interviews, wrote essays and made little newspapers. During these years we have done the same again and again, particularly in the 5. and 6. classes. In some years our pupils have had some kind of practical training in these companies.

次に、私がどのように学校と企業との協力を始めたかです。私たちは、地元の店(例えば、広告やクリスマスの即興的演技)と共に、ペーパーワイヤー(1つのクラスのための神様の会社)を作る工場を「tho 地方銀行」(もう1つのクラスのための

神様の会社)と協力をしました。私たちの原則は、協力をして両グループが利益を得ることです。学校が何かをしたり、会社に支払ったりすることは必ずしも(たった一つの)正しい方法ではありません。他方、私たちは、同様に重要であることですが、この関係ができる限り長く持続してほしいと考えています。お互いの油井を知っている両者が、協力がより深くなることです。

This is how we have started cooperation between the school and enterprises. We have made cooperation with the local shop (for example advertisements and Christmas happening), with factory that makes paperwire (The god company for one class) and with the local bank (The god company for another class). Our principle in cooperation is that both parties will gain by it. It is not necessarily the (only) right way that the school does something and the company pays for it. On the other hand we think, that it's also important that relationships last as long as possible. Both sides get to learn each others well, cooperation get's deeper.

同時に、カリキュラムの改革をしました。Lapua で、私たちは Lapua モデルを作りました:すべての学校は、国のカリキュラムに基づいて、自分たち独自のカリキュラムを作成しました。教育委員会はすべての学校に輪郭を書くように期待しました。私たちは、私たちのカリキュラムに属する起業家の精神が何かを教えました、当時私たちは起業家教育をととても具体的な方法を見ました。

At the same time came the curriculum reform. In Lapua we made the Lapua model: every school made its' own curriculum based on national curriculum grounds. The education board expected every school to profile. We taught that the spirit of enterprise was something, that belongs in our curriculum, although in those days we saw enterprise education quite concrete way.

Kauhajärvi は絨毯の村です。10年前には Kauhajärvi に約 40 の絨毯織物工場がありました。今では、約 20 が残っています。私たちは絨毯の企業に集中させることに決めました。私たちの児童生徒は、これらの企業を訪問して、どのようにして工業的に絨毯を作っているかを見学し、起業家たちは、その仕事について児童生徒に話しました。私たちは織機を借り、始めに数人の織工の母親が、教師のために、機織りについての基本的なことを考えました。その後、私たちは児童生徒と一緒に絨毯の機織りを始めました。1993 年からすべての少女と少年が自分自身のために、少しずつ絨毯を機織りました。今、織機が唸り、私たちはお金を集め始めました。

Kauhajärvi is a village with carpets. Ten years ago there were about 40 carpet textile mills in Kauhajarvi. Now there are about 20 left. We decided to concentrate in carpet enterprises. Our pupils visited these enterprises, saw how they made carpets industrially and entrepreneurs told pupils about their work. We borrowed looms and at first some weaver mothers thought the basic things about weaving to teacher. After that we started carpet weaving with pupils. Since 1993 every girl and boy has woven a little carpet for his or her own. Now we are collecting money to buy our own looms.

さらに、私たちがどのように始めたかです。私たちは正しい方法を見いだそうとしました。それから、私たち教師がもっと多くの起業家教育についての情報を必要とする状況になりました。バーサ大学は教師のために教育を整理し、私たちはみなこのコースに参加しました。それはとても良いことでした。我々と一緒に「宿題」を作り、大いに議論し、自分自身の仕事に反映しました。私たちは自分たちのチームを通して、起業家教育を研究し始めました。私たちは自分たちが研究したものを私たちや私たちのチームに適用しようとしてきました。相違点に対して私たちの寛容であることは、他の

者と一緒に計画を立てている者の理解，共通のプロジェクトの理解，共通の反映の理解を同様に増していきます。私たちはそれぞれさらに他の者を刺激し，お互いに成功を示しました。結局，働くことの雰囲気がいよりの良くなりました。これらすべてが学校でできる起業家教育に関して強い基盤を与えました。

This was how we started. We tried to find the right way. Then came the situation, that we teachers needed more information about enterprise education. The university of Vaasa arranged education for teachers and we all took part in such courses. That was a very good thing. We made "homework" together, we discussed a lot, we reflected our own work and so on. We started to study enterprise education through our own team. We tried to apply the things we studied to us, to our team. Our tolerance for dissimilarity grew as well as understanding of others, planning together, common projects and common reflecting. We spurred each other more and we showed our success to each other. And after all the working climate got better. This all gave a strong ground on the enterprise education our school gives.

1997 ~ 98 に，Lapua の22の学校と同様に，私たちは，ひまわりプロジェクト (Vaasa 大学) に参加しました。

In 1997-98 we took part in Sunflower project (The university of Vaasa) as 22 schools in Lapua did.

私たちの仕事は起業家教育のために新しい教授モデルと題材を見いだすことでした。スタートのために，私たちは，私たちがすでに実行するすべての起業家精神を表にしました：神様の児童生徒，食堂での手伝い，物を売ること，キオスクを持っていることなど。私たちはすでに多くのことを実行していることに気付きました。私たちの自尊心がより育ち，異なった何かを試してみる多くの勇気を得ました。ひまわりの中の私たちのテーマは，自尊心をより大きくする経験になりました。目標は，あらゆる種類の起業家精神の土壌である，温かくて安全な雰囲気を創造することでした。私たちは，児童生徒が社会上心理上のリスクをもつような雰囲気や他の者へ新考案を示し挑戦するような雰囲気を作ろうとすることです。

Our job was to find new teaching models and materials for enterprise education. For start we listed all the enterprising things we already do: god pupils, helping in lunchroom, selling things, having a kiosk and so on. We noticed that we do a lot already. Our self-esteem got better and we got more courage to try on something different. Our theme in The sunflower was Through the experiences to the better self-esteem. The goal was to create a warm and safe climate that is a ground for all kind of enterprising. The climate is still very important for us. It is actually the basic thing. We try to create a such kind of climate that pupils have a courage to take social and psychological risks and that they dare to show their innovations to others.

少しずつ起業家教育は私たちのすべてのために重要なものを操作します。私たちのカリキュラムでの中心的な考えは：進取的に良い生活に向かうこと。最近では，みんなのために何をするかが起業家教育の基本です。我々はいつもプロジェクトをしません，しかし，それが可能であるとき，私たちは日常生活で起業家精神の見地に気付こうとします。私たちは，児童生徒に創造的で，起業家精神に富み，自分自身で動機付けする，責任をもつよう，奨励します。私たちは，彼らにリスクを冒し，最善を尽くすよう励まします。もし私たちが機会を得るなら，もちろん税金や利益なども教え

ます。

Little by little the enterprising education game important thing for all of us. The main idea in our curriculum is : Enterprisingly towards good life. Nowadays enterprise education is the basic for all what we do. We don't do projects all the time, but we try to notice enterprising point of view in everyday life when ever it is possible. We encourage pupils to be creative, enterprising, self-motivated and responsible. We encourage them to take risks and to get things done. If we get a chance, of course we teach what are taxes, what is profit and so on.

毎年、私たちはテーマを我々の起業家教育のために選びます。以下のテーマがあります。

- 1) 何ができるかを示すことを学ぶ方法
- 2) 試みてください。あなたはあなたができていることに気付きます！
- 3) あなたができるマーケティング
- 4) 仕事の質。それは何を意味するか？
- 5) 過去に起業家精神に富んだ生活がありました。私たちは過去から何を学ぶことができるか？

学校で学ぶ間に、私たちはテーマの下で、より大きいか、あるいはより小さいプロジェクトを行います。私たちは、大きい(期間の長い)共通のプロジェクトもありますし、しばしば、私たちのクラスの同じように、より小さい(期間の短い)プロジェクトもあります。

Every year we choose a theme for our enterprise education. There has been such themes as 1)How to learn to show what you can? 2) Try - you notice that you can! 3) Marketing what you can 4) The quality of work - what does that mean? 5) There has been enterprising life before - What can we learn from the past? During the school year we have bigger or smaller projects under the theme. We may have a big common project, but often we have also smaller ones of our own classes.

いくつかの毎日の例

- ・一人であったり、みんな一緒での、「カラオケ」で歌うこと。教師は、あまり上手な歌手ではないけれども、歌うことを約束したとき、社会的リスクを負いました。彼は、児童生徒のためにとっても良い例でした。彼は勇気を持っていました。彼の後に皆が同じことをしました、そして、我々はすべて楽しみ、おもしろくなりました。
- ・新考案に気付くこと。児童生徒は、毎日かなりのたくさんを新考案をします。教師が、それらに気付くことはとても重要です。2人の少年が、コンピュータでフォーミュラレースを作成していました。教師は、そのことに気付いたり、ほかの児童生徒が新しく手に入れたものに気付いたりしました。
- ・実行しましょう。あるクラスがクラスのお祝いの会を手配することを望みました。かなりしばしば、児童生徒は何かをすることを望みます。彼らは考えをもち、彼らは、そのために教師が何かをするを待ちます。教師は生徒のために場所を提供すべきです。少年少女は手伝えますが、実行することを許されません。
- ・「なぜ」ではない。人よ、なぜであってください。試みるのを避けるイエスでありなさい、人よ。

Some everyday examples:

- ・ Singing "karaoke" together, alone. The teacher took a social risk when he promised to sing although he is not a very good singer. He was an very good example for the pupils.

He had courage to do that. After him everyone did the same, and we all enjoyed and had fun.

・ Noticing an innovation. The pupils make quite a lot innovations daily. It's very important that the teacher notice them. Two boys had created a formula race by computer. Teacher noticed that and other pupils got a new game.

・ Get things done. One class wanted to arrange classcelebration. Quite often pupils would like to do something. They have an idea and they wait for teacher to do something for them. The teacher should give space for the pupils. He or she can help but is not allowed to do.

・ Be a why not -person! Try avoid to be a yes but -person!

いくつかの大きい（期間の長い）プロジェクト：

・ ひまわりプロジェクト。私たちは例えば私たちがろうそくで作った異なった物を試みるために、プロジェクトの日々の経験を構成し直し、私たちは夕食とダンスの大きな祝いの会を構成し直し、私たちはハイキングツアーをし、私たちは高校生と一緒に活動し、私たちは大きい輪止めに色を塗り、私たちは問題を解決していきました。

・ フィンランドのオーク-プロジェクト。私たちは、絨毯を作る古い方法についての情報を集めました。私たちは俳優を招待し、私たちと一緒に演劇を作る監督 **Kristiina Hurmerinta** がこれらの情報を基礎づけました。親たちがこのプロジェクトに参加しました。このプロジェクトは博物館と一緒に構成し直されました。

・ 情報技術プロジェクトとしての教育の聖職者の任務の下の雪玉プロジェクト。私たちは芸術と ADP を一緒に結合させた。私たちは美術展（児童生徒と村人からの絵画と手工芸）を手配しました。すべての仕事はデジタルの写真を取り、これらの写真はカレンダーで使われました。私たちは会社が私たちと共にこのプロジェクトに加わることを期待します。このプロジェクトの間に私たちは ADP のために教室を手に入れ、情報技術の技能は、今改善することがより容易になっています。

Some big projects:

・ Sunflower-project. We arranged experiences, project-days for trying different things for example we made candles, we arranged a big celebration with dinner and dancing, we made hiking tour, we acted with senior high school students, we painted big chocks and we resolved problems.

・ Finnish Oak-project. We collected information about our village, about old ways to do carpets. We invited an actor and director, Kristiina Hurmerinta, to create a play with us based on these information. Parents took part in this project. This project was arranged with museum.

・ Snowball-project under Ministry of Education was an information technology-project. We banded art an ADP together. We arranged an art exhibition (paintings and handworks from pupils and villagers) . All works were photograph digital and the photos are used in calendar. We expect companies to join us in this project. During this project we got a classroom for ADP and information technology skills are now easier to Improve.

私たちは起業家精神教育は、学校において日常生活の一部であると思います。児童生徒が実行し、考え、決定し、リスクを冒し、作り出し、物を手に入れるなら、プロジェクトは何でもできます。起業家教育とビジネスを考慮に入れるプロジェクトは、かなり簡単なプロジェクトです。小学校には、プロジェクトのための多くの時間がなく、需要さえありません。

We think that enterprise education is a part of everyday life in school. The project can be

whatever if the pupils are the ones who do, who think, who decide, who take risks, who create, who get the things done and so on. Those projects which consider entrepreneurs and business are quite small ones. In primary school there isn't much time or even need for them.

(出典：Enterprise education in Kauhajärvi)

(3) Kauhajärvi でみられるフィンランド型アントレプレナーシップ教育の題材と理念

【題材や単元】

- ・ 食堂の手伝い
- ・ 物を売ること
- ・ キオスクの運営
- ・ カラオケ
- ・ コンピュータ・ゲームを作ること
- ・ お祝いの会
- ・ 「ひまわりプロジェクト」(長期間)
ろうそく作り, 夕食とダンスの会,
ハイキングツアー
- ・ 「オーク・プロジェクト」(長期間)
演劇
- ・ 「雪玉プロジェクト」(長期間)
美術展を開く,
デジタルの写真でカレンダー作り

【キーワード】

- ・ 温かい安全な雰囲気
- ・ 進取的に良い生活に向かうこと
- ・ みんなのために何をするのか
- ・ 実行する
- ・ 考える
- ・ 決定する
- ・ リスクを冒す
- ・ 作り出す
- ・ 物を手に入れる

【理念】

- ・ 何ができるかを学ぶ。方法論。
- ・ あなたができることに気付く。やってみる(試行)。
- ・ マーケティング。調査。
- ・ 何を意味するか。高い仕事の質。
- ・ 過去から学ぶ。教訓。

Kauhajärvi のアントレプレナーシップ教育は、プロジェクト型・活動型の学習であり、その中で、「様々な参加者の観点から社会を認識すること」「市民的な参加に必要な能力を開発させること」「起業的な方法のための土台を作ること」を手伝っていくのである。

第2節 フィンランドの指導要領にみる各教科などの配当時間

フィンランドの統合的教科横断テーマの配当時間は、表3-1からは見あたらない。学校独自で決められる自由裁量の時間であるようである。ここでは、第6学年をみていく。

基礎教育での授業の新しい配当時間 "new distribution of lesson hours in basic education"表3-1

Subject 教科	1	2	3	4	5	6	7	8	9	Total	
Mother tongue and Literature 母国語と文学	14		14			3or4	14			42	
A-language 第1言語	-----				8	2	8			16	
B-language 第2言語	-----								6	6	
Mathematics 数学	6	12				3or4	14			32	
Environmental studies 環境調査	Environmental and natural studies 9				3 3or4		7		7		31
Biology and geography 生物学と地理											
Physics and chemistry 物理学と化学											
Health education 健康教育											
Religion or ethics 宗教あるいは倫理学	6				1		5			11	
History and social studies 歴史と社会科	-----					3	1or2		7	10	
Music 音楽	Arts, crafts, and Physical education 26		4~ 4~ 4~ 8~		30		1 1 1or2 2		3~ 4~ 7~ 10~		56
Visual arts 図画											
Crafts 工作											
Physical education 体育											
Home economics 家庭科	-----								3	3	
Educational and Vocational guidance 上級教育と職業への指導の実施	-----								2	2	
Optional subjects 選択教科	(13)									13	
The pupil's minimum amount of lessons 児童生徒の最低時間総計数	19	19	23	23	24	24	30	30	30	222	
Voluntary A-language 任意の第1言語	-----					(6)		(6)		(12)	

----- : The subject is not taught at this grade unless the curriculum states otherwise.
() : is taught as an optional object

(出典：Finnish National Board of Education ISBN 952-13-2081-8)

フィンランドの

年間最低授業時間数 (38週)

第1学年・第2学年 722時間(1年850時間・2年910時間)

第3学年・第4学年 874時間(3年945時間・4年980時間)

第5学年・第6学年 912時間(5年6年980時間)

() の値は日本の授業時間数 第7学年・第8学年・第9学年 1140時間(中学1015時間)

フィンランドの基礎学校1～6年の週学習時間は、日本（35週計算）と比べると、やや少ない。第1学年・第2学年は、週19時間（日本第1学年約25時間、第2学年26時間）以上で、第3学年・第4学年は、週23時間（日本第3学年27時間、第4学年28時間）、第5学年・第6学年は、週24時間（日本第5・6学年28時間）である。しかしながら、基礎学校第7～第9学年は、週30時間（日本中学校各学年29時間）とわずかながら日本より時間数が多い。日本の小学校段階の年令では、フィンランドはゆとりのある授業時間を組んでいるといえる。

さらに、第6学年で両国を詳しく比較してみると、

【日本】			【フィンランド】	
国語	175 時間	┌───┐ │ │ └───┘	母国語と文学	133 時間
外国語活動	35 時間		第1外国語	76 時間
算数	175 時間	───	数学	133 時間
理科	105 時間	───	理科的教科	95 時間
社会	105 時間	───	歴史と社会科	57 時間
音楽	50 時間	┌───┐ │ │ └───┘	実技教科	285 時間
図画工作	50 時間		(音楽・図画・工作・体育)	
体育	50 時間			
道徳	35 時間	───	宗教あるいは倫理学	47.5 時間
総合的な学習の時間	70 時間	┌───┐ │ │ └───┘	統合的教科横断テーマ?	時間
特別活動の時間	35 時間			

言語の時間は、日本が新学習指導要領の段階になると、肩を並べる状況だが、フィンランドの社会科に関わる時間が極端に少ない。さらに、フィンランドの総合科（統合的教科横断テーマ）は、配当時間が決められていないようで、自由に使っている状況（自由裁量の時間）である。

SUBJECTS IN BASIC EDUCATION(GRADES 1-9)

表 3 - 2

Subject	1	2	3	4	5	6	1-6	7	8	9	1-9	
Mother tongue	7	7	5	5	4-5	5	33-34	3	3	3	9	42-43
A1-language			2	2	2	2	8	2	3	3	8	16
B-language								2	2	2	6	6
Mathematics	3	3	4	4	4	4	22	3	3	4	10	32
Environmental Studies	1-2	2	3	3			9-10					9-10
Biology/Geography					2	1-2	3-4	2	2	3	7	10-11
Physics/Chemistry					1	1	2					2
Chemistry								1	1,5	1	7	7
Physics								1	1,5	1		
Health Education								0-2	0-2	0-2	3	3
Religion/Ethics	1	1	1	1-2	1-2	2	8-9	1	1	1	3	11-12
History/Social Studies					2	1-2	3-4	2	2	3	7	10-11
Music	1-	1-	1-	1-	1-	1-	6-	1			1	7-
Visual Art	1-	1-	1-	1-	1-	1-	6-	2			2	8-
Craft	1-	1-	2-	2-	2-	2-	10-	3			3	13-
Physical education	2-	2-	2-	2-	2-	2-	12-	2	2	2	6	18-
Home economics								3			3	3
Pupil counseling								0-1	0-1	0-1	2	2
Elective subjects									7	6	13	13
Lessons per week	19-21	19-21	23-25	23-25	25-26	25-26	134-144	30-32	30	30	90-92	224-236
Optional language				2	2	2	6	2	2	2	6	12

CLASSES	1	2	3	4	5	6	1-6	7	8	9	7-9	1-9
Finnish	7	7	5	5	5	5	-	3	3	3	-	42-43
A 1-language (English)	-	-	2	2	2	2	-	2	3	3	-	16
B1-language (Swedish)	-	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-	6
Mathematics	3	3	4	4	4	4	-	3	3	4	-	32
Environmental studies	2	2	3	3	-	-	-	-	-	-	-	9-10
Biology/Geography	-	-	-	-	2	2	-	2	2	3	-	10-11
Physics/Chemistry	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2
Chemistry	-	-	-	-	-	-	-	1	1,5	1	-	3,5
Physics	-	-	-	-	-	-	-	1	1,5	1	-	3,5
Health education	-	-	-	-	-	-	-	1,5	1,5	0	-	3
Religion	1	1	1	2	1	2	-	1	1	1	-	11-12
History/Civics	-	-	-	-	2	1	-	2	2	3	-	10-11
Music	2	1	1	1	2	2	-	1	-	-	-	7-
Art	1	2	2	2	2	2	-	2	-	-	-	8-
Crafts	2	2	2	2	2	2	-	3	-	-	-	13-
PE	2	2	3	3	3	3	-	2	2	2	-	18-
Cookery	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	3
Student counselling	-	-	-	-	-	-	-	0,5	0,5	1	-	2
Elective subjects	-	-	-	-	-	-	-	0	7	6	-	13
Lessons per week	20	20	23	24	26	26	134-144	30-32	30	30	-	224-236
Elective A2-language	-	-	-	2	2	2	-	2	2	2	-	-

JYVÄSKYLÄN NORMAALIKOULU
6. A-LUOKKA / OPETTAJA
LV 2004-2005

Viikko 13: Lämpö ja energia						
	28.3. 2. pääsiäisp.	29.3.	30.3.	31.3.	1.4.	
KLO	MA	TI	KE	TO	PE	
8 - 9	Lihunta PÄÄSIÄIS- LOMAA	Saksa A2		Matematiikka Murotuvat	Lihunta	
9 - 10	Teema/BG	A-ryhmä: Sanatohot B-ryhmä: SAKSA A2	Englanti	Uskonto/ET Orokkainen kirjko	Musiikki	
10 - 11	Teema/ÄI	Matematiikka Murotuvat	Teema/KU Savityö	Käsityö	Matematiikka Murotuvat	
11 - 12	Teema/ÄI	Musiikki	Teema/KU Savityö	Käsityö	Englanti	
12 - 13	Teema	Teema/ÄI Näytelmä	Matematiikka	Teema Energia-tema	Uskonto/ET Orokkainen kirjko	
13 - 14	B-ryhmä:	Teema/ÄI Näytelmä	Teema/ÄI Sanatohot	Saksa A2/		
			Liikunta	VANHEN- PAINILTA KLO 18.00		

JYVÄSKYLÄN NORMAALIKOULU
6. A-LUOKKA / OPETTAJA
LV 2004-2005

Viikko 12: Tutkimme energiaa - pääsiäinen						
	21.3.	22.3.	23.3.	24.4.	25.3.	
KLO	MA	TI	KE	TO	PE	
8 - 9	Lihunta	Saksa A2	Teema Pääsiäinen	Kirjastoai Teema Pääsiäinen	Lihunta HYVÄ PÄÄSIÄIS- LOMAA!	
9 - 10	Matematiikka Murotuvat	A-ryhmä: ÄI: Sjatuodot Kuj, haaj. B-ryhmä: SAKSA A2	Englanti	Uskonto/ET Pääsiäinen	Musiikki	
10 - 11	Teema/FyKe Energia	Matematiikka Murotuvat	Teema/KU Naamio	Pääsiäisjuhla	Matematiikka	
11 - 12	Teema/ÄI	Musiikki	Teema/KU Naamio	Käsityö • Robin Hoodin pukujen sovittaminen	Englanti	
12 - 13	Teema/ÄI Näytelmä	Teema Näytelmä	Matematiikka Murotuvat	Koulupäivä pitäty ruokailu jälkeen 12.15	Uskonto/ET	
13 - 14	B-ryhmä: Aiduoell: Sjatuodot	Teema Näytelmä	Äidinkieli Sjatuodot			Sunnuntai: Kesäilä alkaa
			Liikunta			

表3-3は、フィンランドのJYVÄSKYLÄN NORMAALIKOULU校の第6学年第12週と第13週の時間割である。どちらの週もテーマ学習（統合的教科横断テーマ）が8時間ずつ入っている。第12週のテーマ学習は、「ドラマ」3時間、「マスク」2時間、「エネルギー」1時間、「イースター」1時間、その他1時間を配当している。第12週は、全28時間の計画だから、8/28が統合的教科横断テーマに当てられ、6年生の1週間の最低時間数24時間（表3-1）に4時間上乗せして、この週の学習を進めていることとなる。

1947年版学習指導要領(試案)社会科の目標は、29頁でも述べたが、その1～15の項のうち、

1. 生徒が、人間としての自覚を深めて人格を發展させるように導き、社会連帯性の意識を強めて、共同生活の進歩に貢献するとともに、礼儀正しい社会人として行動するように導くこと。
2. 生徒に各種の社会、すなわち家庭・学校及び種々の団体について、その構成員の役割と相互の依存関係とを理解させ、自己の地位と責任とを自覚させること。
3. 社会生活において事象を合理的に判断するとともに、社会の秩序や法を尊重して行動する態度を養い、更に政治的な諸問題に対して宣伝の意味を理解し、自分で種々の情報を集めて、科学的総合的な自分の考えを立て、正義・公正・寛容・友愛の精神をもって、共同の福祉を増進する関心と能力とを發展させること。
7. 各地域・各階層・各職域の人々の生活の特質を理解させ、国内融和と国際親善に貢献する素地を養うこと。
9. 社会生活が常に發展するものであることを知り、過去の事績を背景として現代の特質を理解し、将来の方向を見わたす能力を養うこと。
10. 各種の職業についてその社会生活に対する意義を十分理解し、他人の職業を尊重する態度を強め、自己の職業の選択を正しく行い、能率の高い職業活動のできる能力を養うこと。
11. 社会生活における勤労の価値を理解するとともに、勤労によって産業の發展に寄与する能力、及び勤労を尊ぶ態度を養うこと。

がフィンランドのアントレプレナーシップ教育の目標や目的と一致すると考えている。

ここでは、1949年『新しいカリキュラムの実践』の櫻田小学校の第5学年中心学習「京浜の運輸」と第6学年中心学習「新聞とラジオ」と1949年『カリキュラム』の石川師範学校男子部附属小学校の第6学年「新聞とラジオ」の実践を紹介し、分析する。

は、筆者がアントレプレナーシップ教育だと考えている活動

(1) 5年生の中心学習「京浜の運輸」(160～230時間)現場学習・視聴覚学習

児童の経験活動	教師の準備と指導
<p>△京浜地帯の模型を作る。</p> <p>1. 旅行をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○東京を中心として地方に出ている鉄道・船について調べる。 ○各地の地図、絵葉書、パンフレットによって場所を選定する。 ○時間表、運賃表を見て調べる。 ○事故防止について話し合い、役割を決め、携行品の打ち合わせをする。 ○旅行した後の結果を整理してレポートを作る。 ○報告会、反省会を開く。 <p>2. 交通網とその施設について調べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○地図により京浜地帯の位置と地理条件について調べ、地図模型を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○環境構成として教室内に各地の絵葉書、パンフレット等をはっておく。 ○なるべく京浜地帯を見渡せる所の選定に、方向を向けさせる。神武寺、鷹取山、観音崎灯台、三崎油壺等。 ○自主計画を重んじ、各グループ編成にし、駅管理部等の交渉をさせる。 ○磁石の必要について話し、携行品について注釈し、また輸送意を与え相談させる。 ○地図の符号について指導する。 ○縮尺と、地図の高低の読み方についての指導をする。 ○4年単元「宿場」を思い出させ、その際学習した事について

- 昔の交通について考え、本や映画、幻灯を見て調べる。
- 結果を図表、グラフ、紙芝居、幻灯に作って発表する。
- 新橋駅の昔と今の様子を見に行き話を聞き、模型に新橋駅を入れる。
- 駅で働いている人の様子を調べる。
- 昔と今の鉄道、道路を比較し地図に表す。
- 近代的な日比谷公園付近の道路の写生をする。
- 京浜地帯にある都市を調べ、これをつなぐ交通機関について調べる。
- 京浜国道に行き交通量を調べ、地図でその位置を見て模型に入れる。
- 車庫を見学し、蒸気機関車と電気機関車を比較し、また輸送意を与え相談させる。
- 現状について話を聞く。
- 模型に車庫を作って入れる。
- 東京より横浜まで電車で往復して窓から見えたものを調べる。
- 調べた事について話し合いをして、結果を整理し、本で調べたり交通博物館へ行ったり関係の映画、幻灯を見たりして知識を深める。
- 汽車、電車、自動車、鉄橋、トンネル、高架線、駅、交通標識、踏切等を作って模型に入れる。

3. 物の輸送について調べる。

- 京浜地帯にある工場とその生産物について調べる。
- これらの販路について調べる。
- 他に京浜地帯のよな所が無いか地図を見て、比較し、そのことの関係を知る。
- 各地から集まる品物と行き先について汐留駅に行き調べる。
- 荷物の送り方と送られ方について話を聞く。
- 貨物の旅について紙芝居、幻灯を作る。
- 貨物の種類によって貨車の型がちがう事を調べスケッチする。
- 工場汐留駅貨車等を作って模型に置く。

4. 海上輸送と船について

- 東京港や横浜港へ行き、港の施設と船について調べる。
- 横浜、横須賀、大阪、神戸港等と比較してみる。
- 棧橋、岸壁、ドック、税関、防波堤等を作って模型にのせる。
- 東京湾を一周した人の話を聞く。
- 東京港、横浜港より外国へ行く航路を調べて図に表す。
- 無線電信やその他いろいろの通信の仕方を調べられるようになる。
- 海の気象について話を聞き、自分達で観測の器械を作って風向、風力、風速その他を計って見る。
- いろいろな船を見てスケッチをする。
- 日本の船舶の統計を調べグラフを作る。
- 造船所の見学をする。
- 船の構造について話を聞き質問をする。
- 工程のメモを取り働いている人の様子を見る。
- いろいろな船の名前と部分の名前を調べる。
- 港の模型と釣り合うような船の模型を作る。

5. 全体的構成をする。

- 今まで調べた事によって出来上がって来た模型をもう一度地図に合わせて調べる。
- 施設のぬけていないように作ってたす。
- 全部一度に動かせるように時間表と信号を作る。
- 時間通りに規則正しく動かしてみる。
- 供出したお米石炭の輸送を模型の上で実際にやってみる。
- 時間を早くしてそして安全に運行させる工夫をする。

6. 発表会を開く。

- 計画について話し合う。
- 案内状を出す。
- 発表会を開く。
- 模型を上手に動かす。
- 交通の将来について話し合う。
- 反省会をする。

て指導する。

- 交通博物館、通信博物館、国立博物館も関係出品についてあらかじめ調査しておく。
- 新橋駅の交渉と汐留駅内の出発点の記念碑の見学引率。
- 動くものの写生についての指導。
- 記入法（調査の準備）についての指導、天候時間曜日等の考慮。
- 美しく見えるための配色とポスターカラーの利用についての指導。

- 蒸気機関車の原理とシリンダー、動輪についての説明。
- 立ったままメモを取る訓練。
- 予備知識としてどんな施設が、いかなる形をしているか注意を喚起しておく。

- 映画機関車物語、幻灯橋物語、汽車の信号等の借用。
- 地形模型との釣り合いの考慮
- 実感の出たものを作るための材料を考えさせる。

- 産業と交通運輸との関係を理解させる。
- 消費地としての京浜地帯の理解。
- 京阪神、北九州等の工業地帯との関係に於ける京浜地帯の国際性の強調。
- 貨物駅の構成と作業について理解をさせ、ここで労働基準法の概要について指導する。
- 擬人法の作文の書き方についての指導。
- 貨車の名称と積載量等について理解させる。
- 陸上輸送の施設についての一応のまとめをさせるノートの整理。

- 港と陸上交通との聯関に注意を向ける。
- 港の性格は周囲の地域との関係によって決まってくる事を理解させる。
- 税関が日本経済にもたらす役割について強調する。
- 地理的に見た、港の立地条件について考えさせる。
- ここで羽田飛行場の話をして聞かせる。
- 映画「灯台」を見せる。
- 音楽「灯台守り」の指導。
- 無線の符号と電信機を作製させる。
- 気象観測の方法の指導と機械の作製をさせる。
- 年鑑、辞典等の見方の指導とその整備。
- 動力の変遷についての指導。
- 造船過程の確認。
- 労働者と組合、賃金についての質問に注意を向ける。
- 海上の交通施設、機関の一応の完成をさせる。
- 小さくても形の正確なものを尊ぶ態度を教師はいつも持っている。
- 大きさの不釣り合いの個所の修正。

- 全体的施設の補充。
- 各グループの分担？と、各自の仕事について考えさせる。
- 何回もそのグループ各に練習させてみる。
- 前に作った貨物の旅の作文の読み合いにより良いものを選んでみる。
- 何回も全体で練習して見る。
- カルミネーションとしての模型によるドラマチックプレーを行う。
- 時間的な正確さを要求する。

- ・反省会について
- ①単元全体の流れについての反省。
- ②グループの活動について。
- ③学習態度について
- ④製作物について。
- ⑤ノートの整理について。
- ⑥発表会について

(2) 6年生の中心学習「新聞とラジオ」(96時間) は、筆者がアントレプレナーシップ教育だと考えている活動

内容となる経験	指導の要点
<p>△壁新聞を作る。</p> <p>(1) いろいろな壁新聞を集める。</p> <p>(2) 第1号発行について計画をたてる。</p> <p>(3) 作業する。</p> <p>①名前をつける。</p> <p>②絵やカットをかく。</p> <p>③作文論説をかく。</p> <p>④スペースの割合を決める。</p> <p>⑤編集する。</p> <p>(4) 発行する。</p> <p>(5) 反省する。</p> <p>(6) 第2号発行の計画をたてる。</p> <p>①読者層を決める。</p> <p>②各学年向けを手分けする。</p> <p>③能率的な発行を考える。</p> <p>④分業の方法を考える。</p> <p>⑤美的構成を考える。</p> <p>(7) 作業する。</p> <p>①スペースを割り当てる。</p> <p>②分担して作る。</p> <p>③木版を入れる。</p> <p>④編集して仕上げる。</p> <p>(8) 発行し反省する。</p>	<p>△報道の一つの方法として、しかも技術的に考えても児童に容易に作成させる壁新聞を本単元の導入段階として取り上げ、その効用や作り方について知らせる。と共に印刷新聞への関心を持たせ、尚取材や編集に対する一応の経験を持たせるように指導したい。</p> <p>△作文作詩、論説等充分国語の指導と関連を持って指導する。</p> <p>△面積の計算と全体のスペース割り当て等算数能力を十分にねるようにする。</p> <p>△美的構成、絵、カット版画等図画工作科との密接な関連を保つようにすること。</p>
<p>△印刷新聞を発行する。</p> <p>(1) 発行の計画について話し合い研究問題を定める。</p> <p>(2) 各種の新聞を集めて読み記事の種類分けをする。</p> <p>(3) 各種の新聞記事のスペースを計算して、平均の割合について面積の%を求める。</p> <p>(4) それをもとにして印刷新聞のスペースの割合を決める。</p> <p>(5) 記事の集め方や書き方を練習する。</p> <p>(6) 謄写印刷を練習する。</p> <p>(7) 第1号を発行してみる。</p> <p>(8) 反省して更により計画をたてる。</p>	<p>△最初完から全なるものを作らせる事を目的とせず第1号の作製が爾後の学習活動の動機となり得る多くの問題を生じて来るように指導すべきである。</p> <p>△面積の計算や%の求める等算数能力の修練の機会を充分考える方がよい。</p> <p>△新聞に対する関心を深め、或程度読めるようにしたい。</p> <p>△記事としての条件はどんなものがあるか考えさせるようにする。</p> <p>△謄写印刷を学級全体に練習させ、特技者を発見するようにすべきである。</p>
<p>△新聞社を見学する。</p> <p>(1) 見学する新聞社を決定する。</p> <p>(2) 交渉の手紙をかき交渉する。</p> <p>(3) 研究問題を分担する。</p> <p>(4) 見学して研究する。</p> <p>①組織について</p> <p>②発行のプロセスについて</p> <p>③通信網について</p> <p>④新聞発達の歴史について</p> <p>⑤会社事業について</p> <p>⑥汽車の勤務と適正について</p> <p>(5) 見学のまとめをする。</p>	<p>△交渉のために必要な条件を具備した手紙がかかるように指導する。</p> <p>△見学に当たっては、新聞発行のプロセス新聞社の組織機能を知らせると共に、新聞の歴史や通信網について理解させる。</p> <p>△新聞記者が日夜どのように働いているかを知らせる。</p>
<p>△新聞用紙の生産の研究をする。</p> <p>(1) 映画や本で調べる。</p> <p>(2) 研究の結果をまとめる。</p> <p>①紙芝居に表現する。</p> <p>②年表にかく。</p> <p>③図表に表す。</p>	<p>△製紙の発達が新聞発達の裏づけをなしている事を知らせる。</p> <p>△現代の製紙がどのようにして大量生産しているかを知らせる。</p>
<p>△印刷法の研究をする。</p>	<p>△印刷法の発達は、製紙の発達と共に新聞の発達史上に於い</p>

- (1) 印刷法の発達を本で調べる。
- (2) 印刷法の種類を調べる。
- (3) 活字の発明について調べ、活字を集め分類する。
- (4) グーテンベルヒと本木昌造の貢献について調べる。
- (5) 活字を使用して壁新聞を作る。

△学級新聞を発行する。

- (1) 今までの研究をもとにして計画する。
- (2) 組織や役割を決める。
- (3) 記事の集め方について練習する。
- (4) 他校と記事の交換をする。
- (5) 分担して編集発行する。
- (6) 課外発行について計画をたてる。

△新聞以外の報道について研究する。

- (1) 電話を研究する。
- (2) 電信機を作って通信してみる。
- (3) 印刷物(雑誌, 単行本)の役目を調べる。
- (4) 映画による報道について話し合う。
- (5) うわさについて話し合う。
- (6) ラジオについて話し合う。

△新聞とラジオの効用を比較する。

- (1) 新聞の効用について話し合う。
- (2) 新聞とラジオの効用を比較する。
- (3) 将来の新聞やラジオの発達について話し合う。
 - ① 実際の新聞について
 - ② 学級の新聞について
 - ③ ラジオについて

△模擬放送をする。

- (1) どんなものを放送する話し合う。
- (2) 本木昌造の脚本を作る。
- (3) 練習して放送してみる。
- (4) 反省する。
- (5) 擬音や音楽を入れて練習してみる。
- (6) 放送する。
- (7) 反省する。

△放送局を見学する。

- (1) 番組について話を聞く。
- (2) 放送の聞こえるまでを見たり聞いたりする。
- (3) 放送上の注意や苦心を聞く。
- (4) 組織を調べる。
- (5) スタジオの構造について調べる。
- (6) ラジオの発達の歴史について話を聞く。
- (7) 放送網について調べる。
- (8) 見学の結果をまとめる。

△放送による発表会を開く。

- (1) 計画する。
- (2) 番組(プロ)を作る。
- (3) 記念号学級新聞を発行する。
- (4) 各係を決める。
- (5) 会場を作る。
- (6) 放送のテストをする。
- (7) 案内状を出す。
- (8) 発表会をする。
- (9) 反省をする。

て切り離すことの出来ないものであることを理解させる。

△グーテンベルヒの苦勞とその功績の内容について知らせる。

△謄写印刷によって一つの組織の中で初歩的な新聞発行の仕事を手につけさせると共に、分担して仕事をすすめる事を上手にする。

・編集の任務が新聞発行の生命である事を知らせる。

△いろいろな報道がどんな経路や方法によって行われているかを理解させると共に、新聞やラジオが最も近代的であることを知らせる。

△各報道機関の特長や欠陥?を発見させるように指導する。

△聴覚と視覚による大きな差異を見出し、それぞれにその限界点の存在する事を見せさせる。

△今後の放送報道の中心的な存在としてはテレビジョン時代であろう事を考えさせる。

△放送に対する初歩的な技術を養うと共に、放送に関する問題把握の段階として考え、完全なる放送の目的として学習させるのではない。

△音に対する感覚を養うように指導する。

△放送がどんな順序で聞こえるか、放送局はどんな組織でどのように働いているかの大要を理解させる。

△アナウンサーの勤務とその特性を理解させる。

△音の反響や、防音について科学的にその構造を理解させるようにする。

△日本の放送局や、外国の有名な放送局の分布を知らせる。

△終末として、今までの研究実践が巧みに、合目的におり込まれるように指導する。

△父兄その他の大人を対照とする発表が上手にできるようにする。

△児童の気持ちが最高潮になるが如くまとめる。

(3) 新聞とラジオ (第6学年) 4月第1週～6月第5週 石川師範学校男子部附属小学校
見出しなどのゴチック体は、筆者が加工。 は、筆者がアントレプレナーシップ教育だと考えている活動。

目 標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新聞ラジオのもっている社会的意義を調べる。 2. 現在の社会情勢一般を知る。 3. 新聞社、放送局、出版社を見学する。 4. 新聞、ラジオ、印刷術の発達の歴史を調べる。 5. 新聞の構成及び新聞が家に配達される迄の労務に就いて調べる。 6. ラジオ放送の内容及びそれが聴取者に達する迄の経路について調べる。 7. 学級新聞、壁新聞、校内放送等を計画し実行する。 	<ol style="list-style-type: none"> 8. 編集、放送等の技能を得させる。 9. 外国との通信の実際に新聞、ラジオの果たす役割を調べる。 10. 新聞、ラジオ、出版が如何に機械の恩恵を受けて発達し能率をあげているかを調べる。 11. 新聞を学習に利用する方法を考える。 12. 各種ラジオ通信機関の発明と功績を知り、人類のためまい念願と努力のあとを理解する。 	
設 定 の 理 由	<p>社会の要求</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 報道、通信は正確、迅速に行われねばならぬ。 2. 新聞、ラジオは社会民主化に対するその役割を自覚し、自由で公平な活動を展開せねばならぬ。 3. 新聞、ラジオ、書籍が安価で容易に一般大衆に供給されねばならぬ。 4. 新聞、ラジオ、書籍により新しい知識や教養を獲得し、生活の合理化、社会の発展に貢献しなければならぬ。 5. 報道、通信、出版事業に対する理解を深めると共に、その発展と内容充実の為に協力すべきである。 6. 大衆の世論を容れその運営を改善向上すべきである。 	<p>児童の実態</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子供新聞の疑問欄、科学欄や電話の利用、拡声器による演出等を喜び科学的な操作や好奇心が基だ強い。 2. 子供新聞をよんだり、学級新聞を作ったりしているし、又、「子供の時間」の放送や学校放送、野球の実況放送等でラジオに親しみ深く一部の児童は放送局に於いて実演した体験がある、尚一般の新聞の記事内容には比較的関心がうすく、把握も適確でない。 3. 新聞、ラジオの効用は理解しているが発達の歴史についてはあまり興味を持っていない。 4. 金沢市に於ける各種新聞、ラジオの普及の状態は大体知っているが他地方の利用状況等は余り知らない。 5. ラジオ放送の内容も相当聴き得る力があり、書写力も小筋肉の発達により進歩している。 6. 共同編集作業や共同演出練習或いはその結果に対する正しい批評が児童の興味をかりたてている。 7. 二十のとびら、野球放送に興味を持っており、又学級新聞や子供新聞の漫画に強い興味を持っている。 	
学 習 の 構 想	<p>予想される問題</p> <p>人格の発達 どのように民主的な協力をして新聞作成やラジオ報道等に当たるか。</p> <p>天然資源の保護保全 各種の予報によって天然資源がどのように保護保全されているか。</p> <p>生産 新聞や書籍はどのようにして作られるか。</p> <p>分配 新聞やラジオがどのようにして容易に重要な文化財を吾々に与えているか。</p> <p>消費 新聞をよんだり読書したりラジオを聞いたりするのに一日の生活に於いてどのように時間を費しているか。</p> <p>交通通信 報道、通信、連絡がどのようになされているか。</p> <p>保健と安全 新聞やラジオは人間の保健や安全に対してどのような役割を果たしているか。</p> <p>教養 教養を高める上に新聞やラジオはどのように利用したらいいか。</p> <p>娯楽 吾々の娯楽生活に新聞やラジオはどんな影響を与えているか。</p> <p>政治 民主政治の発展に新聞やラジオはどのような役割を果たしているか。</p> <p>交際 文化の交流や国際親善に、新聞、ラジオ、出版等がどのような働きを持っているか。</p>	<p>主要な学習経験</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 計画 新聞発行、校内放送、出版、鉱石ラジオ、新聞社、放送局、出版社の見学 2. 見学調査 訪問 新聞社、放送局、出版社、記者、技術者、書店、電気器具商 3. 資料の蒐集と利用 各種新聞、ラジオ、図書、関係地図、模型、見本、標本、装置、幻灯 4. 図表化 地図 分布関係図 図解、機械、工程、組織、内容構成、作業分担、ラジオ配線、年表、普及史、発達史 5. 言語及び文章による表現 研究のまとめ、礼状、対話、研究発表、放送等 6. 計量統計とその利用 機械能率、利用者数、経費、時間、発行数 7. 審美的諸活動 礼状、放送、劇化、音楽、絵画、表現会、文集、作詩、作曲 	
	中 心 学 習	効 果 の 判 定	
4 月	<ol style="list-style-type: none"> 1. 新聞 <ol style="list-style-type: none"> ①学級新聞を発行する。 <ol style="list-style-type: none"> イ、発行する新聞の種類と内容をきめる。 ロ、編集について相談する。 ハ、発行方法、期日、作業分担をきめる。 ニ、グループ別で新聞を発行する。(新聞研究の必要が起こる。) ②新聞にはどんな記事がのせられているか。 <ol style="list-style-type: none"> イ、いろいろな新聞を集める。 ロ、購読新聞を調べる。 ハ、いろいろな新聞と私達の新聞の記事や内容体裁などを比較する。 ニ、新聞の分割形式を調べる。 ホ、最も多く出ている記事は何か。 ヘ、新聞の内容を分類していろいろな統計を取る。 ト、学級新聞にはどんな記事をのせればよいかについて話し合う。 ③北国毎日新聞社を見学する。 <ol style="list-style-type: none"> イ、新聞社の仕事の分担や組織はどうなっているか。 ロ、新聞ができるまでにはどんな経過をたどるか。 ハ、工程や様子を絵にかいてみる。 ニ、ニュースの集め方はどの様に行われているか。 ホ、事件発生からその様子が記事に盛られ吾々に届くまでの経過を紙芝居にする。 ヘ、記者の働きや外国ニュースの入手について ト、正確、迅速に報道する為にどんな苦心が払われているか。 チ、市内版と地方版 リ、編集技術についてのお話をきく。 ヌ、発行部数について調べる。 ル、輪転機の機構機能等について調べる。 	<p>新聞編集の能力 資料蒐集の態度と能力 新聞の記事内容に対する理解 統計分類する能力 新聞社の組織に対する理解 新聞の製作過程の理解 紙芝居製作の能力 社会に果たす新聞の任務についての理解 新聞を製作する上にどのような苦心がはらわれているかという理解 輪転機の機能に対する理解 統計作成利用の能力 新聞はどうして安価で大量に生産されるかという理解 従業員に対する感謝の態度 学級新聞の共同製作の態度 脚本創作の能力</p>	観 筆 観 筆 観 筆 筆 筆 観 口 観 観 筆 筆 筆 観

	<p>ヲ、活字について研究する。 ワ、従業員の苦心について カ、消費する紙の質及び価格を計算する。 コ、新聞はどのようにして安価に作られるのだろう。 タ、新聞社の歴史について調べる。 レ、新聞社見学の感想作文を作る。 ソ、見学した新聞社へ礼状を出す。 ツ、新聞切り抜き整理の仕方を研究し分担や部門をきめて継続実施する。</p> <p>④弥生新聞を組織して記念号を発行する。 イ、よい学級新聞を発行するには、これまでのものを、どう改善しなければならぬか。 体裁や配置や文字やカット、記事、社説 ロ、学級新聞のよい名前を一般児童から募集する。 ハ、記者、論説係、発行係などをきめ、学級新聞をつくる。 編集の重点をきめる。</p>		
5月	<p>文芸欄原稿募集のポスターを作る。 記事内容についての輿論調査をする。 新聞社見学の欄を作る。 ニ、学校や実社会から記事を集める。 色彩、カットの取り入れ方 協同的作業態度の反省 チ、今後の発行について話し合う。</p> <p>⑤新聞は吾々にどんな便利を与えているか。 ⑥新聞発達の歴史を調べる。 イ、おふれ、うわさ、飛脚等の絵や資料を集める。 ロ、かわら版の発明について話し合う。 ハ、昔の新聞と今の新聞をくらべる。 ニ、新聞の発達を紙芝居であらわす。 ホ、活字や輪転機の発明について調べる。 印刷術はどのように発達してきたか 新聞発行に必要な通信機械とその発達史</p> <p>⑦通信機と電話について調べる。 イ、原理を調べる。 ロ、模作してみる。 ハ、エジソンやマルコニーについて調べる。 ニ、発達や変遷について調べる。 ホ、普及状況やその効果について調べる。 ヘ、簡易な電信機や電話を作ってみる。 ト、モールス符号について調べる。</p> <p>⑧出版 イ、印刷工場を訪ねて印刷のようすを見学する。 ロ、書籍の体裁や配字効果等について調べる。 ハ、活字の規格を調べる。 ニ、いろいろな印刷の仕方を研究する。 ホ、「私達の身体」のレポートを作る。 ヘ、書物雑誌等を持ち寄って学級文庫を作る。 ト、文化の発達と印刷術の進歩について調べる。</p>	<p>分担した仕事を責任をもって運行する態度 新聞を学習に利用する力 新聞編集の能力 短文を要領よく書く能力 見出しや記事の配列に新しさをもちたせる能力 新聞の効用に対する理解 資料蒐集の能力や態度 新聞発達の歴史に対する理解 活字の種類に対する理解 礼状を書く能力 電信、電話機の原理に対する理解 新聞、ラジオその他通信の発達に貢献した人に対する理解 器具製作能力 見学の態度 正確な統計や図表を製作する能力</p>	<p>親観親観 親筆親筆 筆親親観</p>
6月	<p>2. ラジオ ①校内放送をする。 イ、ラジオについて話し合う。 ロ、プログラムを作る。 ハ、物語、朗読、詩歌、劇、音楽等の分担をきめて練習する。 ニ、放送設備を工夫する。 ホ、校内放送をして出来ばえを反省する。 ヘ、各級から批評をきく。 ト、局からの放送をきき私たちの放送とくらべてみる。 チ、放送局の一日のプログラムの組み立てを調べる。</p> <p>②金沢放送局を見学する。 イ、放送局はどうなっており、どのように仕事を分担しているか。 ロ、放送室や機械室はどうなっているか。 ハ、播音はどんなにして出すかを調べる。 ニ、一日のプログラムの組み方はどのような計画で行われているか。 ホ、放送局の方々に苦心をきく。 ヘ、局の学校放送はどのように行われているか。 ト、ニュースはどのようにして手に入れるか。</p> <p>③校内放送を継続して行う。 イ、プログラムにはどんな内容をもればよいか。 ロ、ドラマ、音楽などを練習する。 ハ、他学級とも連絡し継続して行う。 ニ、ラジオ受信機の操作になれさす。 ホ、鉱石ラジオを作る。(自由研究)</p> <p>④ラジオの利用 イ、どのようにラジオを利用したらよいか。 ロ、ラジオの利用普及の状況を調べ統計をとる。 ハ、私たちは学習にラジオをどのように利用したらよいか。 ニ、ラジオ放送局の分担図を作る。 ホ、ラジオと新聞の効用を比較する。 ヘ、ラジオの発明と発達について調べる。 ト、テレビジョンについて話をきく。</p>	<p>プログラムの構成能力 学校放送に対する態度 他人の批判を受け入れ自己の発展に資する態度 放送技術 脚本製作能力 朗読の能力 見学の態度 放送に要する施設についての理解 放送を学習に利用する能力 ラジオの効用についての理解 ラジオ放送が行われる過程を理解 時事問題に対する理解 ラジオ受信機を操作する能力 国内及国外に於けるラジオの普及についての理解 放送局の分布 新聞とラジオの効用の相違についての理解 ラジオを学習に利用する能力や態度</p>	<p>親観 親観親観 親観理筆 筆筆筆家 筆筆筆友</p>

ここでは後に、現在の5年生単元「わたしたちの生活と情報」と比較するため、前節(2) 櫻田小の実践「新聞とラジオ」を取り上げて、考察する。

(1) アントレプレナーシップ教育的単元構成

- ①壁新聞を作る。
- ②印刷新聞を作る。
- ③新聞社を見学する。
- ④新聞用紙の生産を研究する。
- ⑤印刷法を研究する。
- ⑥学級新聞を発行する。
- ⑦新聞以外の報道について研究する。
- ⑧新聞とラジオの効用の比較をする。
- ⑨模擬放送をする。
- ⑩放送局を見学する。
- ⑪放送による発表会を開く。

単元は、壁新聞作りから始まり、放送による発表会を開くで終わっているが、これは、アントレで始まって、アントレで終わる単元構成を取っている。また、随所にアントレプレナーシップ教育的活動が盛り込まれている。

私は、このようなアントレプレナーシップ教育的活動は、「プロジェクト型」であり、「活動型」であり、「How型」だと考えている。

つまり、活動がまずあり、こどもたちは試行錯誤しながら進んでいく中で、様々な障害や課題に出会い、克服し、また、国語科はもとより、算数(数学)科、理科、図画工作科、音楽科の内容もクロスオーバーし、問題解決する過程で、単元が構成されていると考えている。

そして、この過程を踏み進みながら、こどもたちは、知識や技能を獲得してゆくのだと考えている。OECDの「問題解決の道筋が瞬時には明白ではなく、応用問題と思われるリテラシー領域あるいはカリキュラム領域が数学、科学、または読解のうちの単一の領域だけには存在していない、現実の領域横断的な状況に直面した場合に、認知プロセスを用いて、問題に対処し、解決することができる能力。」を目指していると考えられる。

(2) 「印刷新聞を発行する」過程にみるアントレプレナーシップ教育

△印刷新聞を発行する。

(ア) 発行の計画について話し合い研究問題を定める。

(イ) 各種の新聞を集めて読み記事の種類分けをする。

(ウ) 各種の新聞記事のスペースを計算して、平均の割合について面積の%を求める。

(エ) それをもとにして印刷新聞のスペースの割合を決める。

(オ) 記事の集め方や書き方を練習する。

(カ) 謄写印刷を練習する。

(キ) 第1号を発行してみる。

(ク) 反省して更により計画をたてる。

まず、発行ありきである。発行する(活動)ために、こどもたちは、直面する問題と対峙していくこととなる。一つ一つ問題を解決しながら進んでいく。(ウ)(エ)のように数学的課題もあるし、レイアウトしたり、カット入れたり、印刷したりと、図画的課題もある。そして、さらに、進むための「話し合い活動」がある。

ここには、系統的知識ではなく、生きて働く知識がある。「基礎的な言語や思考能力は機能的に獲得されるべきである。基礎的な技能は繰り返しやるから定着するのではなくて、使う機会や応用する範囲が広がっていくと同時の形成される。」(OECD)の知識がここにある。

第6節 1947版社会科編にみるアントレプレナーシップ教育

表3-4(51頁)は、木村博一が『1947年度 学習指導要領社会科編(I)(試案)』「第1章序論第5節社会科の教材」にある各学年の「問題」を整理したものである。アントレプレナーシップ教育と考えられる項目に を入れた。1947年度学習指導要領社会科編(I)は、大半の学習問題が、「どうすればよいか。」という問題であり、まさに「How型単元」であり、「活動型単元」であり、「プロジェクト型単元」であり、アントレプレナーシップ教育と言えるのである。

1947年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
人格の発達(しつけ)	I. 家や学校で、よい子と思われには私たちはどうすればよいか。	I. 世の中に慣れるには、私たちはどうすればよいか。	I. 世の中で一人前になるには私たちはどうすればよいか。		I. 私たちはどのように勉強すればよいか。	II. 社会を発展させるものは何か。
生命の保護保全	II. 私たちはどうすれば丈夫でいられるか。	II. 私たちはどうしたら健康で安全にいられるか。 VIII. どうすれば私たちの身のまわりの清潔にすることができるか。	VII. 私たちは、水や電気やガスをどのように使えばよいか。	II. 私たちの祖先は、どのようにして、いろいろな危険を防いだか。	II. どうすれば私たちは自分自身を安全に健康にすることができるか。	III. どうすれば私たちは安全な生活ができるか。
財産・資源の保護保全	III. 自分のものや人のものを使うには私たちはどうすればよいか。	III. 草木の世話をした草たりするに私たちが使っはどうか。	IV. 動植物はどのように人間に頼っているか。 V. 動物はどのように人間にやくだっているか。	III. 動植物、鉱物等の天然資源はどのように利用できるか。	III. 自分・家・学校・町村・国の財産にはどのようなものに保護保全されているか。	IV. 私たちと私たちの子孫のために、天然資源を保存するには私たちはどうすればよいか。
物と施設の生産分配	IV. 私たちは食物や衣服住居をどのようにして手に入れるか。	IV. 私たちは日常生活に必要ないろいろなものをどうやって作り、どのように分配しているか。	VI. いろいろなものを手に入れるには、私たちはどうすればよいか。 III. 家はどのようにして建てるか。	I. 私たちの祖先は、どのようにして家の場を定め、家を建てたか。 II. 自然環境の道具を備えつけたか。 IV. 困難な自然環境のもを手に入れたりするには私たちはどうすればよいか。	IV. 現代の産業は、いかにして発達してきたか。	I. 仕事を通じて、人々はどのように協力するか。 VI. 工場生産はどこにどのように発達するか。
物と施設の消費		V. 日常生活に必要な品物を有効に使うには、私たちはどうするか。	II. 適当な着物を選ぶには、私たちはどうすればよいか。	V. 困難な自然環境のもを有効に使うには、私たちはどうすればよいか。	V. 発明発見はどのくらい私たちの生活を豊かにしたか。	V. 上手なものの買い方には私たちはどんな知識を必要とするか。
交通・通信・運輸		V. 日常生活に必要な品物を有効に使うには、私たちはどうするか。	VIII. 土地によって交通運輸の方法がどのように異なっているか。	VI. 交通運輸の道すじは、どのようにして決まるか。	VI. どのようにして私たちは通信したり、意見交換したり、旅行したりできるか。	
交際			IX. ほかのなかまの者と仲よくするには私たちはどうすればよいか。	VII. ほかの土地の人と仲よくするには、私たちはどうすればよいか。	VII. 外国人との交際はどのようにして行われるか。	VIII. 世界じゅうの人々が仲よくするには私たちはどうすればよいか。
厚生慰安(娯楽と宗教)	VI. 私たちはどうすればみなと一しょに楽しい時間を持てるか。	VII. 私たちはどうしたら楽しい時間が過ごせるか。	X. 国や宗教上の祝祭行事は各地で、どのように行われているか。	VIII. 私たちの祖先に、寺社はどのような役目を果たしたか。	VIII. 私たちの生活を楽しくするためには、私たちはどうすればよいか。	VII. 時間の余裕を作るには、どのように文明の施設を使えばよいか、またその時間を有効に使うには私たちはどうすればよいか。
統制	(出典：木村博一、『日本社会科の成立理念とカリキュラム構造』2006, 風間書房)			IX. 社会生活を統制して行くにはどんな施設が必要か。	IX. 国家統治には、どんな施設が必要か。	

第4章 これからの日本の社会科教育とアントレプレナーシップ教育

第1節 日本でのアントレプレナーシップ教育の目標・内容・目的

私は、日本でのアントレプレナーシップ教育の目標をフィンランドのものと同じにし、

- ① 様々な参加者の観点から、社会を認識すること。
- ② 市民的な参加に必要な能力を開発すること。
- ③ 起業的な方法のための土台を作ること。

の3点としたい。

内容としては、

- ① みんなのために何をするのか（社会の中の役割と相互の依存関係）
- ② 進取的によりよい生活をめざす（社会生活の発展・進歩への貢献）
- ③ 温かい安全な雰囲気をもつ（正義・公正・寛容・友愛）

を底流にもち、活動の過程として、「考える」「決定する」「実行する（試行錯誤する）」「リスクを冒す」「作り出す（製作・製造）」「物を手に入れる（売買）」がある。

また、目的としては、①創造力、②コミュニケーション力、③チームワーク力、④プレゼンテーション力、⑤判断力、⑥問題解決能力、⑦チャレンジ精神を養うことである。

言い換えれば、アントレプレナーシップ教育は、「How型単元」であり、「活動型単元」であり、「プロジェクト型単元」であると考えている。

1947年版指導要領（試案）第5学年を例に取って考えると、「私たちはどのように勉強すればよいか。」「どうすれば私たちは自分を安全に且つ健康にすることができるか。」「どのようにして私たちは通信したり、意見を交換したり、旅行したりできるか。」「外国人との交際はどのようにして行われるか。」「私たちの生活を楽しくするためには、私たちはどうすればよいか。」という目標の単元（How型単元）を活動型単元として展開していくことが、日本でのアントレプレナーシップ教育なのである。具体的には、この章の第3節と第4節で考えていくこととする。

第2節 今頃の社会科教育

「新聞とラジオ」の単元は、櫻田小学校が96時間、石川師範学校男子部附属小学校が推定60時間（週5時間12週計算）で展開している。一方、京都市の「わたしたちの生活と情報」は、その5分の1の12時間である。

12時間の内訳は、「放送局の働き」または「新聞社の働き」で5時間、「情報と社会」で7時間、である。実際に新聞やテレビ番組、ホームページを作る時間は無いに等しい。作っているなら、12時間をはるかに超えているだろう。試行錯誤しながらなんて、以ての外である。

学習問題でみると、「放送局」では、「番組作りの流れ」「必要な道具や機械」「外国とのつながり」「働く人の数やスケジュール」「働く人の様子や役割」「工夫や努力、願い」であり、「新聞」では、「新聞の作り方」「必要な道具や機械」「外国とのつながり」「働く人の数やスケジュール」「働く人の様子や役割」「工夫や努力、願い」である。果たして実感の湧かない段階で、こどもたちから、このような学習問題がでてくるだろうか。仮に出てきたとしたら、こどもたちにとって、切実でない、断片的な、羅列的な、(系統的であるかもしれない)一般的な疑問・質問なのであろう。

学習問題は、具体的な社会事象から生まれてくるものである。櫻田小の問題が如何に具体的であるかは明白である。

さらに、こどもたちが追究するための時間も少ないだろう。どうやって調べるのか？、見学に行けなかったらどうするのか？（行けなかったら、調べるのに時間がかかるといえるだろう）、見学の時間は、その5時間に含まれるのか？ など悩みは多い。だとすると、学習資料を見つけたり準備したり、学習問題を作ったりするのは、教師になってしまうのかもしれない。こどもの主体的学びはそこには無いように思う。何と云っても、単元の時間数が少なすぎるのである。「放送局」「新聞」ともに、学習計画を立てているが、4時間配当でそのような活動が盛り込めるのだろうか。

「情報と社会（7時間）」では、学習問題は作っていない、「テレビ会議」「学級新聞」を作ることになっているが、1時間や2時間でできるだろうか。失敗もするだろうし、困難や障害にもぶつかるだろうし、考えているだけで、1時間が過ぎるかもしれない。

世の中は、シャープでスピードのある活動を求めているのかもしれないが、すべてのこ

表4-1 京都市指導計画 小学校5年社会科(2005年作成)

わたしたちの生活と情報 (a案)「放送局」、(b案)「新聞社」 (12時間)																													
目標	<ul style="list-style-type: none"> 通信などの産業は国民の生活と深いかわりがあることや大きな影響力を及ぼしていること、従事している人々は情報を速く正確に伝えるために工夫や努力をしていることを理解し、情報を有効に活用するようにする。 通信などの産業に従事する人々の様子や人々の情報活用の様子を見学したり、資料を効果的に活用したりして調べ、通信などの産業と国民生活とのかかわりやその果たしている役割について考えるようにする。 																												
a案	<p>○ ほしい情報を手に入れる (1時間)</p> <p>1 放送局の働き (4時間)</p>																												
目標	<ul style="list-style-type: none"> 放送局では働く人々が情報を正確に速く伝える工夫や努力をしていることを理解するようにする。 放送局で働く人々の様子について見学や資料を効果的に活用して調べ、放送局が果たしている役割を考えるようにする。 																												
単元の評価規準	<p>【社会的事象への関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 放送局の働きに関心をもち、工夫や努力をして番組をつくる人々の様子を意欲的に調べようとする。 <p>【社会的な思考・判断】</p> <ul style="list-style-type: none"> 番組をつくる人々の情報を正確に速く伝える工夫や努力をもとに、放送局の果たす役割を考え適切に判断する。 <p>【観察・資料活用の技能・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> 放送局の見学や視聴覚教材などの資料を効果的に活用して、放送局で働く人々の様子を調べ、表現する。 <p>【社会的事象についての知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 放送局で働く人々は、情報を正確に速く伝えるために工夫や努力をしていることを理解している。 																												
過程	<table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">学 習 活 動</th> <th colspan="4">評価の重点</th> <th rowspan="2">評価の視点 (評価の方法)</th> </tr> <tr> <th>関</th> <th>思</th> <th>観</th> <th>知</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <p>〈導入〉「ほしい情報を手に入れる」(1時間)</p> <p>「情報に囲まれた生活」</p> <p>①生活の中で、情報を得る方法を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビ、新聞、インターネット、ラジオ <p>○どのような時に、どのような方法を使うのか、話し合う。</p> <p>1 放送局の働き(4時間)</p> <p>「テレビとニュース」</p> <p>①新聞のテレビ番組表から、ニュースの時間をぬき出し、ニュースを見る理由を話し合う。</p> <p>○録画したニュース番組やニュースの放送本番組中のスタジオの写真から学習問題を見つけ、学習計画を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 放送局の人々は、ニュースを正確に速く伝えるためにどのような工夫や努力をしているのだろう。 </div> <p>《わたしの学習問題》</p> <ul style="list-style-type: none"> 番組作りの流れ、必要な道具や機械、外国とのつながり、働く人の数やスケジュール、働く人の様子や役割、工夫や努力、願い <p>《学習計画》</p> <ul style="list-style-type: none"> 調べる内容や方法、準備物、必要なもの、日程計画 <p>「ニュースをつくる」、「ニュースを放送する」</p> <p>②③テレビの放送局を見学する。</p> <p>《放送局の見学》</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物や部屋の様子、番組の様子、働いている人の様子、使っている道具や機械、資料の数・種類 <p>《働く人に質問》</p> </td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td> <p>身の周りにある様々な情報について、生活とかわらせて見つけ、関心をもとうとしている。</p> <p>(ノート・発言)</p> </td> </tr> <tr> <td>つかむ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td> <p>情報を正確に速く伝えるための放送局で働く人々の工夫や努力についての問題をつくることができる。</p> <p>(ノート・発言)</p> </td> </tr> <tr> <td>調べる</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td> <p>見学や質問などから自分の問題について調べ、まとめることができる。</p> <p>(行動観察・ノート)</p> </td> </tr> </tbody> </table>	学 習 活 動	評価の重点				評価の視点 (評価の方法)	関	思	観	知	<p>〈導入〉「ほしい情報を手に入れる」(1時間)</p> <p>「情報に囲まれた生活」</p> <p>①生活の中で、情報を得る方法を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビ、新聞、インターネット、ラジオ <p>○どのような時に、どのような方法を使うのか、話し合う。</p> <p>1 放送局の働き(4時間)</p> <p>「テレビとニュース」</p> <p>①新聞のテレビ番組表から、ニュースの時間をぬき出し、ニュースを見る理由を話し合う。</p> <p>○録画したニュース番組やニュースの放送本番組中のスタジオの写真から学習問題を見つけ、学習計画を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 放送局の人々は、ニュースを正確に速く伝えるためにどのような工夫や努力をしているのだろう。 </div> <p>《わたしの学習問題》</p> <ul style="list-style-type: none"> 番組作りの流れ、必要な道具や機械、外国とのつながり、働く人の数やスケジュール、働く人の様子や役割、工夫や努力、願い <p>《学習計画》</p> <ul style="list-style-type: none"> 調べる内容や方法、準備物、必要なもの、日程計画 <p>「ニュースをつくる」、「ニュースを放送する」</p> <p>②③テレビの放送局を見学する。</p> <p>《放送局の見学》</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物や部屋の様子、番組の様子、働いている人の様子、使っている道具や機械、資料の数・種類 <p>《働く人に質問》</p>	○				<p>身の周りにある様々な情報について、生活とかわらせて見つけ、関心をもとうとしている。</p> <p>(ノート・発言)</p>	つかむ			○		<p>情報を正確に速く伝えるための放送局で働く人々の工夫や努力についての問題をつくることができる。</p> <p>(ノート・発言)</p>	調べる				○	<p>見学や質問などから自分の問題について調べ、まとめることができる。</p> <p>(行動観察・ノート)</p>
学 習 活 動	評価の重点				評価の視点 (評価の方法)																								
	関	思	観	知																									
<p>〈導入〉「ほしい情報を手に入れる」(1時間)</p> <p>「情報に囲まれた生活」</p> <p>①生活の中で、情報を得る方法を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> テレビ、新聞、インターネット、ラジオ <p>○どのような時に、どのような方法を使うのか、話し合う。</p> <p>1 放送局の働き(4時間)</p> <p>「テレビとニュース」</p> <p>①新聞のテレビ番組表から、ニュースの時間をぬき出し、ニュースを見る理由を話し合う。</p> <p>○録画したニュース番組やニュースの放送本番組中のスタジオの写真から学習問題を見つけ、学習計画を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 放送局の人々は、ニュースを正確に速く伝えるためにどのような工夫や努力をしているのだろう。 </div> <p>《わたしの学習問題》</p> <ul style="list-style-type: none"> 番組作りの流れ、必要な道具や機械、外国とのつながり、働く人の数やスケジュール、働く人の様子や役割、工夫や努力、願い <p>《学習計画》</p> <ul style="list-style-type: none"> 調べる内容や方法、準備物、必要なもの、日程計画 <p>「ニュースをつくる」、「ニュースを放送する」</p> <p>②③テレビの放送局を見学する。</p> <p>《放送局の見学》</p> <ul style="list-style-type: none"> 建物や部屋の様子、番組の様子、働いている人の様子、使っている道具や機械、資料の数・種類 <p>《働く人に質問》</p>	○				<p>身の周りにある様々な情報について、生活とかわらせて見つけ、関心をもとうとしている。</p> <p>(ノート・発言)</p>																								
つかむ			○		<p>情報を正確に速く伝えるための放送局で働く人々の工夫や努力についての問題をつくることができる。</p> <p>(ノート・発言)</p>																								
調べる				○	<p>見学や質問などから自分の問題について調べ、まとめることができる。</p> <p>(行動観察・ノート)</p>																								

<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> 番組を作る流れ、道具や機械の数や種類、外国とのつながり、働く人たちの役割分担、一日のスケジュール、工夫や努力・願い ○放送局で働く人々の工夫や努力について調べたことを交流する。 働く人の役割分担と連携、道具や機械の良さ、各役割での工夫や努力とその意味 「より良いテレビ放送をめざして」 ④外国や地域の出来事を知るために放送局の人々がどのように工夫しているのかを調べ、話し合う。 人工衛星で電波を発信・受信、世界各国の放送局と協力体制、地域の放送局との協力体制 ○どのような人が、どのような活動をしているのだろうか。 海外からニュースを伝えるカメラマンやキャスター、地域に密着して取材する記者 ○カメラマンやキャスターや記者の願いを想像し、放送局の役割について考える。 				<p>放送局で働く人々が情報を正確に速く伝えるために様々な工夫や努力をしていることを理解している。 (ノート・発言)</p> <p>世界や地域の出来事を伝える工夫や努力に気づき、放送局の果たす役割について考える。 (ノート・発言)</p>
<p>b 案</p>	<p>○ ほしい情報を手に入れる 1 新聞社の働き</p>	<p>(1時間) (4時間)</p>			
<p>目 標</p>	<ul style="list-style-type: none"> 新聞社では働く人々が情報を正確に速く伝える工夫や努力をしていることを理解ようにする。 新聞社で働く人々の様子について見学や資料を効果的に活用して調べ、新聞社が果たしている役割を考えるようにする。 				
<p>単 元 の 評 価 規 準</p>	<p>【社会的事象への関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞社の働きに関心をもち、工夫や努力をして記事をつくる人々の様子を意欲的に調べようとする。 <p>【社会的な思考・判断】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞をつくる人々の情報を速く正確に伝える工夫や努力をもとに、新聞社の果たす役割について考え、適切に判断する。 <p>【観察・資料活用の技能・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞社の見学や視聴覚教材などの資料を効果的に活用して、新聞社で働く人々の様子を調べ、表現する。 <p>【社会的事象についての知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞社で働く人々は情報を正確に速く伝えるために工夫や努力をしていることを理解している。 				
<p>過 程</p> <p>出会う</p> <p>つかむ</p>	<p style="text-align: center;">学 習 活 動</p> <p>〈導入〉「ほしい情報を手に入れる」(1時間) 「情報に囲まれた生活」</p> <p>① 生活の中で、情報を得る方法を発表する。 ・テレビ、新聞、インターネット、ラジオ</p> <p>○ どのような時に、どのような方法を使うのか、話し合う。</p> <p>1 新聞社の働き(4時間) 「新聞づくりと情報発信」</p> <p>①新聞にのっているものにどんなものがあるか話し合う。</p> <p>○新聞社や働く人の様子の写真から学習問題を見つけ、学習計画を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>新聞社で働く人々は、情報を正確に速く伝えるためにどのように工夫や努力をしているのだろうか。</p> </div> <p>《わたしの学習問題》</p> <ul style="list-style-type: none"> 新聞の作り方、必要な道具や機械、外国とのつながり、働く人の数やスケジュール、働く人の様子や役割、工夫や努力、願い <p>《学習計画》</p>	<p style="text-align: center;">評価の重点</p> <p>関 思 観 知</p>	<p style="text-align: center;">評価の視点 (評価の方法)</p> <p>身の周りにある様々な情報について、生活とかがわらせて見つけ、関心をもとうとしている。 (ノート・発言)</p> <p>情報を正確に速く伝えるための新聞社で働く人々の工夫や努力についての問題をつくることができる。 (ノート・発言)</p>		

調べる	<ul style="list-style-type: none"> ・調べる内容や方法、準備物・必要なもの、日程計画 ②③新聞社を見学する。 《新聞社の見学》 ・建物や部屋の様子、番組の様子、働いている人の様子、使っている道具や機械、資料の数・種類 《働く人に質問》 ・新聞を作る流れ、道具や機械の数や種類、外国とのつながり、働く人たちの分担・役割、一日のスケジュール、工夫や努力・願い ○新聞社で働く人々の工夫や努力について調べたことを交流する。 ・働く人の役割分担と連携、道具や機会のよさ、各役割での工夫や努力の様子 			○	<p>見学や質問などの方法で自分の問題について調べ、まとめることができる。 (行動観察・作品)</p>
まとめる	<ul style="list-style-type: none"> ④わたしたちが外国や地域の出来事を知るために新聞社がどのような工夫をしているのかを調べ、新聞社の役割について考える。 ・インターネットによる情報の送信・受信、世界各国の新聞社との協力体制、外国語による新聞、地域の新聞社との協力体制 ○どのような人が、どのような活動をしているのだろう。 ・海外の出来事を伝えるため直接現地に行くカメラマンや記者、地域に密着して取材する記者 ○記者の願いを想像し、新聞社の役割について考 			○	<p>新聞社で働く人々が情報を正確に速く伝えるために様々な工夫や努力をしていることを理解している。 (ノート・発言)</p> <p>世界や地域の出来事を伝える工夫に気付き、新聞社の果たす役割について考える。 (ノート・発言)</p>

2 情報と社会

(7時間)

目 標	<ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活や産業での情報の働きを理解し、情報を収集し、見分け、効果的に活用するようにする。 ・私たちの生活や産業の中で情報がどのように活用されているかを調べ、我が国の通信などの産業が国民生活に及ぼしている影響やより良い活用について考えるようにする。 																	
単 元 の 評 価 規 準	<p>【社会的事象への関心・意欲・態度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分に必要な価値ある情報を見分け、活用し、発信しようとする。 <p>【社会的な思考・判断】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報は私たちの生活や産業の中でどのような働きをし、どのような影響を与えているかを考え、情報を有効に活用するために適切に判断する。 <p>【観察・資料活用の技能・表現】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活や産業の中で情報がどのように活用されているのかを調べ、まとめる。 <p>【社会的事象についての知識・理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私たちの生活や産業の中で情報は、どのような働きがあり、どのような影響を与えているかを理解している。 																	
過 程	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2" style="width: 50%;">学 習 活 動</th> <th colspan="4">評 価 の 重 点</th> <th rowspan="2">評 価 の 視 点 (評価の方法)</th> </tr> <tr> <th>関</th> <th>思</th> <th>観</th> <th>知</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td style="vertical-align: top;">出 会 う</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: top;">○</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: top;">○</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: top;">○</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: top;">○</td> <td rowspan="2" style="vertical-align: top;"> <p>コマーシャルの工夫について話し合うことを通して、様々なメディアの発信している情報に関心をもつことができる。 (ノート・発言)</p> <p>テレビや新聞などの情報に人々が影響を受けていることに気付き、誤った情報によって生活が変化した人々のおもいについて考えることができる。 (発言・ノート)</p> </td> </tr> <tr> <td style="vertical-align: top;">つ か む</td> </tr> </tbody> </table>	学 習 活 動	評 価 の 重 点				評 価 の 視 点 (評価の方法)	関	思	観	知	出 会 う	○	○	○	○	<p>コマーシャルの工夫について話し合うことを通して、様々なメディアの発信している情報に関心をもつことができる。 (ノート・発言)</p> <p>テレビや新聞などの情報に人々が影響を受けていることに気付き、誤った情報によって生活が変化した人々のおもいについて考えることができる。 (発言・ノート)</p>	つ か む
学 習 活 動	評 価 の 重 点				評 価 の 視 点 (評価の方法)													
	関	思	観	知														
出 会 う	○	○	○	○	<p>コマーシャルの工夫について話し合うことを通して、様々なメディアの発信している情報に関心をもつことができる。 (ノート・発言)</p> <p>テレビや新聞などの情報に人々が影響を受けていることに気付き、誤った情報によって生活が変化した人々のおもいについて考えることができる。 (発言・ノート)</p>													
つ か む																		

	<ul style="list-style-type: none"> ・誤った報道と混乱する様子，過熱取材 ③ コンピュータによる仕事や生活の変化や影響を考え，人々が情報をどのように活用しているのか予想する。 ○ コンピュータによる仕事や生活の変化について話し合う。 ・遠隔医療システム，携帯電話によるチケット購入，ホームページによる情報収集・公開 ○ コンピュータを活用する中での問題点について話し合う。 ・コンピュータ事故による空港の混雑，個人情報情報がもれる ○ 人々が生活や産業の中で，どのように情報を利用しているのか予想する。 ・コンビニで，家庭で <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>毎日の生活や産業の中で，人々は様々な情報に対してどのように工夫して利用しているのだろう。</p> </div>			
調べる	<p>「情報を生かす」</p> <ul style="list-style-type: none"> ④ 人々が様々な情報をどのように活用しているのか調べ，まとめる ・家庭での情報活用の様子を聞く，コンビニの見学や本部の方の話や，農家の方の情報活用の様子を聞く。 			<ul style="list-style-type: none"> ○ コンピュータによる仕事や生活の変化や問題点に気づき，情報活用についての問題を見つけることができる。 (発言・ノート)
まとめる	<ul style="list-style-type: none"> ⑤ 人々の情報活用の工夫について話し合う。 ○ 人々の情報の活用の様子について発表する。 ・天気予報や広告などの情報を活用した洗濯や買い物などの工夫，レジでの売り上げ情報から商品の仕入れの選択，天気予報などの情報を活用した農作業 ○ 情報を活用する上で，大切なことについて話し合う。 ・必要な情報を見分け収集する，いくつかの情報を見比べる。 			<ul style="list-style-type: none"> ○ 見学や聞き取りなどを通して，人々の情報の利用の様子や工夫を調べ，まとめることができる。 (作品・ノート)
生かす	<p>「情報を発信しよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥ テレビ会議や学級新聞などで正しく，分かりやすい情報をつくり，発信する計画を立てる。 ○ だれに <ul style="list-style-type: none"> ・他地域の学校，他学年 ○ どのような方法で <ul style="list-style-type: none"> ・テレビ会議，学級新聞 など ○ どのような内容にするのか。 <ul style="list-style-type: none"> ・身近な出来事について，地域の特色について，他教科や総合学習の内容 ○ 発信する情報をつくる。 <ul style="list-style-type: none"> ・写真や絵の工夫，文章の工夫，全体構成の工夫 ○ 情報を発信する。 ⑦ 情報を発信したことをもとに，情報を活用する上で大切なことについて話し合う。 ○ 毎日の生活の中で，情報を発信する場面を考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ホームページ，チャット，チャット ○ 情報を活用するとき大切なことについて話し合い，「わたしたちの情報活用宣言」を書く。 			<ul style="list-style-type: none"> ○ 私たちが情報を効果的に活用するための工夫について理解することができる。 (発言・ノート) ○ 伝える相手を意識し，分かりやすく内容を工夫しながらまとめ，発信することができる。 (ノート・発言) ○ インターネットやチャットなどの情報について知り，これから情報を活用する上で大切なことを考えることができる。 (プリント，発言)

(出典：京都市教育委員会『京都市小学校指導計画』「社会科5年」，2005。留意点の欄を筆者が省いて作成。)

どもたちにとってと考えると、無理をし過ぎているように思われる。ついていけない状況になってしまう。果ては、系統的な知識暗記重視の社会科に陥ってしまう。テストありきで、学習が進んでいくのである。

第3節 「総合的な学習の時間」からの時間の取り込み

解決策は、総合的な学習の時間 70 時間を社会科に取り込むことである。総合的な学習時間は、以前 110 時間あり、それぞれの学校で実践が積み上げられてきた。それが、40 時間も削減されて、それぞれの学校の積み上げられた総合的な学習の時間の実践を抜本的に見直さなければならなくなるが、これしか現時点では方法がない。あるいは、社会科の単元に、強弱をつけ、長く取り扱う大きな単元と短く取り扱う小さな単元をつくることである。でも、このことは、既にされているでだろうから、単元の自主的な判断による削減しかないであろう。テストで、断片的暗記の問題を問わなければよい。系統的知識なんて、クイズや検定に役立つだけだろう。県名や県庁舎所在地を覚えることが、実社会でどれだけ役立っているのだろう。作者と作品は知っているが、作品を読んでいないという知識の段階と同じである。知識は動的に動く、今日の日本は、昔覚えた「日本は加工貿易の国」という「原料を輸入して、製品を作り、その製品を輸出して立国している国」と一括りにしてはいけないのである。

少しでも、「基礎的な言語や思考能力は機能的に獲得されるべきである。基礎的な技能は繰り返しやるから定着するのではなくて、使う機会や応用する範囲が広がっていくと同時の形成される。」に近づけたいものである。

第4節 「総合的な学習時間」から「統合的教科横断テーマ」の学習へ

(1) 総合は哲学的だ

私は、「社会科は総合だ」と思っているが、そう思っていない人が大多数を占めている。社会科は、その教科そのものが、いろいろな教科とクロスオーバーしているのである。そのことは、環境問題や公害問題で単元をみても、わかりやすい。

- ①水質や空気測定をするのは 理科
- ②統計処理をし、グラフに表すのは 算数
- ③新聞をつくるのは 国語・図画

と、クロスオーバーしている。だから、「総合」なのであるが、社会科という教科を、他の教科と並列に、独立的に考えると教科の本質を錯覚してしまうことになる。総合的な学習の時間もそうで、クロスオーバーしているのに並列・独立に考えてしまっただろうか。

上田薫は、「人間は総合だ」というがまさにそのとおりで、また社会科も総合である。「総合」が難解な哲学的な意味を持つから、「総合」という言葉が深く考えれず曖昧なまま歩き出し、現場では、社会科も総合的な学習の時間も「総合」になっていない状況を生み出している。

(2) 「総合」の看板を降ろし、「統合的教科横断テーマ」の学習とする

フィンランドの「統合的教科横断テーマ」は、わかりやすい。日本でもはっきり「総合的な学習の時間」は「クロスオーバーである」ことを打ち出すほうがわかりやすいだろう。ねらいは「総合」だが、手段は「教科横断」である。

フィンランドの JYÄSKYLÄN NORMAALIKOULU 校の第6学年週8時間の例を挙げたが、毎週8時間というわけでないであろう。また、第12週のテーマ学習は、「ドラマ」3時間、「マスク」2時間、「エネルギー」1時間、「イースター」1時間、その他1時間を分かれており、同じテーマで週8時間すべてを実施しているのではない。第12週は、全28時間の計画だから、 $8/28$ が統合的教科横断テーマに当てられ、6年生の1週間の最低時間数24時間に4時間上乗せして、この週の学習を進めていることとなる。JYÄSKYLÄN NORMAALIKOULU 校では、「統合的教科横断テーマ」の各テーマごとに時間数のめやすを持っているに違いない。どの週も週8時間で年間304時間も「統合的教科横断テーマ」

の学習をしているとは考えにくい。

(3) 柔軟で、裁量が任されている学校にする。

フィンランドの学習指導要領（コア・カリキュラム）はたった1冊（320 ページ）で日本の分冊状態と比べると薄い。一方、フィンランドの教科書は、自主選択で、しかも分厚い（日本の5倍以上の厚さ）。教科書は、全部学習に使わないが、こどもがやりたければ、自主学习や家庭学習などでできる。学び方を大切にしているのである。日本のように親切に精選された（薄い）教科書ではないのである。

今回は、紹介できなかったが、図書館がすごいらしい。調べることが楽しい図書館、読むことが楽しい図書館を日本の学校でも目指すべきである。フィンランドのアントレプレナーシップ教育と同様にまだまだ知りたいテーマの1つである。

(4) フィンランド型アントレプレナーシップ教育とは

基礎学校6年までと、7年からでは、テーマの質が違ってきているようだ。7年生以上になると商業的な活動、経営的な活動、金融的な活動が入ってくる。それまでは、「クリスマスの演劇会をしよう」「絨毯を織ってみよう」など、直接、ビジネスに繋がらない活動をしている。

イギリスやアメリカでは、低い学年から、商業的な活動、経営的な活動、金融的な活動のアントレプレナーシップ教育をしている。私は、イギリス型アメリカ型のアントレプレナーシップ教育を「アングロサクソン型アントレプレナーシップ教育」とよぶことにしている。

フィンランド型アントレプレナーシップ教育は、市場原理の厳しさが全面に晒されるのではなく、「温かい安全な雰囲気」「進取的に良い生活に向かうこと」「みんなのために何をするのか」を大切にしながら、「実行する」「考える」「決定する」「リスクを冒す」「作り出す」「物を手に入れる」ことを学んでいくのである。

(5) 大学との連携と教員研修

第3章第1節にあるように、フィンランドでは、アントレプレナーシップ教育の教員研修を大学でやっている。もちろん、日本でも研修は盛んだが、大学が時代のニーズを知り、

現場に新しい教育を打ち出し、研修することは意義深い。統合的教科横断テーマのような新しい考え方は、教育委員会がイニシアチブを取るよりも、大学がイニシアチブを取った方が、理念がまっすぐに伝わると考えらる。

それとは別に、文部科学省や教育委員会の統制（制御）を弱くし、それぞれの学校の独自性をもっともっと認められなければならない。

流行で、フィンランド・メソッドだと、フィンランドの食指を向けていながら、実際はスキル中心の学習に戻っているのが現場の実態である。テストテストで追いまくり、子どもたちが、学校現場が、成果主義、正答主義になってしまっているのに気付いていないのは、致命的である。

おわりに

フィンランド語は、アルファベット表記だが、日本語と同じ、主語が先で、述語が後の順の文法らしい。韓国語（朝鮮語）やモンゴル語も同じで、私は不思議な親しみを持ってフィンランドをみている。しかし、この論文を書くにあたっては、それが障害となり、フィンランド語が上手く訳せずに、適切な日本語にできなくて、悔しい思いをしている。

フィンランドの人は、2種類の母国語を操り、しかも3番目（第1外国語）に英語を使えるように教育されているようで羨ましい。ここで扱ったコア・カリキュラムは公式に英語版がでており、わかりやすかった。

フィンランドの基礎学校5・6年生の具体的な実践例を方々探したが、また、フィンランド語のホームページも探したが、適切なページを見つけることはできなかった。第3章第1節（2）は、山根栄次先生がフィンランドに研修に行かれたときのレポートを借りての紹介になっている。2004年からのコア・カリキュラムなので、これから実践の公表もあるだろうから、さらに探していきたい。

フィンランドの教育の柔軟性は、学ぶべきである。アントレプレナーシップ教育だけでなく、それこそ総合的にフィンランドの教育を捉えなければならない。フィンランド・メソッドだけに終わってしまうと、「間違ってもいい、やってみよう」「やる気がある」「挑戦してみよう」「根気よく取り組もう」という児童生徒の姿勢・態度の育成には繋がらない。フィンランドは「ゆとり」がありつつ、「レベルが高い」。ということは、「質が高い」ということである。自分自身を含めて、教員の質も高めねばならないし、箱もの（教室など）も見直さなければならない。フィンランドと日本は、こども一人あたりの教員数が同じようである。が、実際は、少人数の学習はフィンランドの方が遙かに進んでいる。フィンランドでは、校長も授業を持っているらしい。日本では、まだまだ、教室でこどもたちが黑板の方を向いた多人数の一斉授業がスタンダードで、フィンランドの先進的な学習方法に目から鱗を落とさなければならぬと考えている。